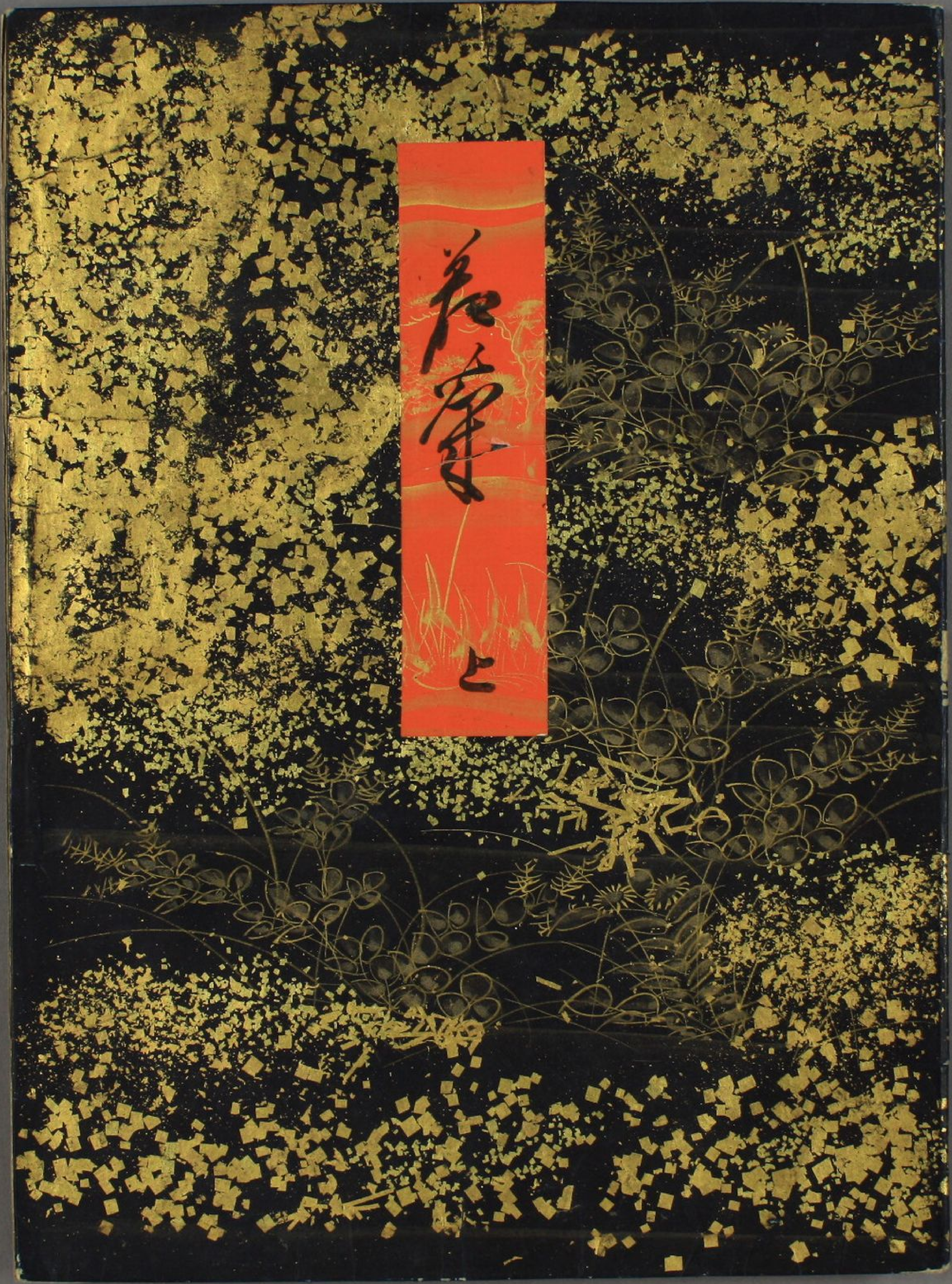

# 花宴　上

石曜文庫

朱雀院のみかとありしみゆきのゝちそのころ
ほひよりれいならすなやみわたらせ給もとよ
りあつしくおはしますうちにこのたひは物心
ほそくおほしめされてとしころおこなひ
のほいふかきをきさいの宮のおはしましつる
ほとはよろつはゝかりきこえさせ給ていま
まておほしとゝこほりつるをなほそのかたにもよほさるゝ
はもこのほとにやあらんよにひさしかるまし
きこゝちなんするなとの給はせてさるへき
御心まうけともせさせ給みこたちは春
宮をおきたてまつりて女宮たちなん

よところおほしましあるそなたにかくらつふ
ときこえし八百年の御代ふそおほします
書院まさし場ときこえなせし時まつ里語て
たかまさら竹あり花ゆくままになま〳〵ろ
今と申してこてゝる所しろさもれ給せすは
まろともなとおほせらひとあくおほまうまなき立衣
はら子てまの語ひ書几八所まつ旅ひおほかた
ともなはそけ子て木はきまそ所の内侍みを
たまひてせてまうす語てくるふ人に参るふ人
なくまえ参り書きこえんなまひなと世しはとに
言まなき道てくみかとま所なおらるいとおし

書きおほかたおほ義こえなき世語なおもかき中世語
かわかひろくくわれしく世中とらくみゆる
御ら子てら世語かし名の所は此女三字を何
まうお所中よすゝ道て人れしき物よ思ひし
つまれにこえ人まゝう此かと所とし十三つわ
まれくはしまへとこそ義ま子て山に五里し
なんのらお世まなたらまま中てたまをたのむ
家主で物しまゝんとかんとおもこれ所す
そうしろめてなけくわし山なる所て
らなく里いてくうる事せなまゝん名との所にそ
きえとせさ物語よろへて文こおかれ所をかき

ことをもはらいふ物語源乃うちにもかんことなく
おほはをてかたくし物にてこしとくよきハりふていい
まほはれ見にみえひりのまにてよらしゆへなる
かたりをハたくこれはゝいふとやうしこまうてせ
たまひてこれつ身くひとなんことみこたちハはなう
ふんともおりまつ春宮ハかつ風流なるやこににさん
て世をそむき物語かへき清らかつひよみなんときさう
物語くやうて物語へ思はて女のよろひさきこ
えさ紫語てまゐをたまへ思すふれる物ほ
えみしはかきまゐりかとみ身ゆくておもすほ
はなくせかかきわなくめて書かハとりこえの
清少納言乃思ことやうにまきこえつゝはさも物語乃かたみにて
よ狭衣乃事世をたてまつりおほんはつひなとき
こえむ物語清とし林とよりハ伴とよくれしと
あひさ物語てはうしろつゝとなくこともく世をか
ろくしかめなかひよ見れし語へハいとこし
伊勢物語くまひ老きこえきき物語これ世よとくみ
乃こゑることもつ伊勢もく女文しられぬはまろのこ
思とくまつゆくさきにもおもひやりなうへぬ
わか道にみほてなりゆへりかまつさ事く
ひとめつくよ見物しみて庭人ハかく思ほに
いかしくぬとハなとしめ将すてす世いる

なんいとくるたしくかれし我い遠なるおかや
うたかたのよにふさ面くよ重てゆかとしめて
おほしゝそはよそみなくよしろゝなと河るハ
さ風ゝてふ毛木まひゆつわりゆ三ゑなすへいハ
あなたなきよりひみそてかをわとなりし我
ゑのとあひくらすてむのゝ世よたよ
ひさしくへんとくいとくしらめてつれしゝ給と
ゆめなきしのこひつて我こえたゝせさなき給女ゆかて
心ころしきさ面よ我こえつま我あなた給さればは
ま女ゆめ我と毛ハまりてとも我め給ひ
しりよみなんいとかしなき給ひしかとゆかなかひ
とゝもえゝ風ハしかゝさ重しかハそれあなにわよ
て我よりまハやさとふてあとものなくとも海こ
とよこゝ給とくめて木まひし給み人とまて
ハおほさとてゑやとそなかへ風かしはさめ
ふよこれゆきともおほしるあてとしれゆきま
海よりゆたなやゝ海とにへなきくなつやますゝ世
給くみおもれとふもいてさせ給つもてゆかのゝ音
ふてとも我くなやまゝ世給へことゝ河里つれと
いとかくらハへなやこなきさ面ふハれしま
さて里つるとこれひハあるをか我りあわとほは
しもりよかゆくそ井しとゆくせ給へ遠と給

かれよりたのミきこえたてまつりたまへる人々ハ
いまさらなつかしくめでたき御ありさまをなやめ
とこ給ひよまゐらせつゝまつり給ふかぎりハなをつ
らうたくおぼしきこえ給ふ六條院にわたし給
とやかくひきこえすくあつかひもしまいらせ給ふ
へきよしきこえめぐらく院ハ侍といくくよろこ
ひきこえさせ給中納言乃君まゐりたま
へるをみそなはしてたゝせ給ひて御物かたりこ
まめやかなること院乃人々の御まへ乃君のみよ御まへ
乃御ゆいごんあまりしなれバにこそ院乃御ことをもま
みかどの御事なんとりわきての御ひたまふ義
しをたのもしきものとなりそくへとかきりなき
まへにハらくはてらよの世ハかつはあへはかれき
てこの御やまわにたちそなたるまゝにえまつりたまへ
あつまんと物するをとしけるのはたれかくるみ
給ふのうし給へる御おもひなるものし給
ふおぬゆかしきんといへとみのくよろしきぬれハこ
となひくかうこ義のうすそれむなしみえ
ゆかるるとなんいかゝへたのもしきいかな
給んたりよらそれは御かハへかこうへへ乃んと
よくもたのもしけうハかひまうをつけまゐりの
せうとにてまうひの御左中弁なるとふもなにかの世

聞こえ給ふやいまゝて又なくしてつかうまつるへきかなと
なりもつむかしく給へきしかたりなく御心ハさひ
しく本上はそれ給ふなけきたへてこそはみちはやさ
またちまし里かくぬれさま御ものやもとれなう
くもゐの御事よきこえはすちたる御心ちして
まへ承らは此御事ハかの御ゆいこんへくたさせ
られまつりさまくしらハかくも思は世はあまう
思きおほしとしかくきこし召おもてなさせたに
し給ふ本いはこといとゝまさしくなん人にはなきは
御幸は後つかへのこと思ひて出わしくおはしませ
らなくあんおほえん給たいめんよ聞こしめすへき事

とかく給りかねゝすこつゝと申しひとめ
給へきよしあるよ中納言とらむ志ほくこ
つて乃御つけ中納言の君をさき給りよ思ん
らるハともかくも聞しめさまへのあらくこへ
とし御わいこと給きくおほ御けふとつかう御
つりまへるなとよは中はと承み給へなり
くほとにハ大小はことにつまてとらしくはさるゝ
聞召思ひなとのついてかたしけなくへらけ
きことなりてなん御とらのあまさるゝおわ
ハ給らのなんくおほ御けの御うしろみを
つかうまつりなく志つなする御むかへさせ

新とくよこそ申めし乃ちハなかにともちぬ
為うちて三磯乃ゆゆいふ乃おとく見えつゝ
まつりこと清くて行はれまし世よハよろひ
乃ほとも身ハつハそのことをよろこひうこきうみ
此人くおほくて其の給なと世て此乃人せ
雖もこゝともなくかきくまならぬまつりことをちり
てもいりのみたりまてこゝろおひ多ちふちて面
しらくなくまいりてら書も為ハしかしきをさら
かくなれハとみくところせき多くのいてゝなひかせ
そのつく月日を流れてもかへりてあふく為
世をきこゆ継なりとそうし給はすまする
なるほとなき道といふとよくとくのひとくゝりてく
しらかをもさるをふくほひていみしく歌のみな
歌をもはしめよとゝめてらまりし世給つてこれ
にてわかハ世給ひめ家代清うしるみやり
こ道をやなすと人しま道の大ほりわか書給ひ
ほ歌たゝみれて今ハいまはみつゝ道ふくるを
なおもしこ給を見さ面に歌しかいとおりし
とみて為歌よみつゝさ給ふ小弱くて昔人と
ても河道と乃給むくる此昔てきそといふ小の面
はかるかしと何のしく思めくのよこれひめ家
をかへたほしおつりてさるへきひとあくハあつ

まうく御前よりく世をてなりひまれなれすやとなん
たゆ乃給すす成とをのつかへまつり給た
よ里を阿わせれなすきやうれとさらやとハたまひ
よ道と小とう給へ々ほ小もなかのハ侍くへき
こゝなきせんしてはかくしてつ侍りぬみまいハよ
越へもさふらひつくへくうさなす人とかわそして
御こゝぬ女房たすとハ乃もまいらくて人まいらこゝなさく
いと阿りかくもみなく給くそらうのいいられ阿まめ
てたなまとあつすいまいらくまいるゆきをたいしてへ
むかいてさるともかの流れかつかにたいハせつ
阿りし御前よハ久なうひまいらこゝ給ふあついとめ道
阿やまりてそまいのこにしもの給ひかわれと以
志乃ふ人をまいらて紗かりく御をにかけ道ハいとさ
ことなりしひとそかしいま八ゝまふらそよ小
も給ひまゐらてひろるとハつ道をいかきかすをと
見ん給るにおひなんいとくくの乃まに作るゝ為
ハしたらてはかくしまいらせてにみ道ハいろく
あさやうかめもなよ御名らしるをみらると
まへくたハ々道てともいとしみて道阿らへま
そのこにつまへくハ小流れるく阿ひとりつき
なうしくらつきてとみなすひた為にこう
よしま阿りて世れなかくてもまさみよ歩し八

かく遠くめつらかなる人のありさまなすり家のうちにおい出ていとゝ此かきりなくなれしきすのよし給ひさかわたまひてしつまりよかへく大ほしかりかと心みましをとつきせひまなくたりく北のかたよりは納言にもまちすあわみきさうしゐとつかうまつりてやさいねして大将の帝給へ思の人のちに遠にいとこのほかにくみよたなるハつきくれ此子のおほえの御するあめるかし御をたにかりことくみさこえ心をら井なとハこ遠もおさくおもてまもしくあやまりてもたよもけりまう御もうかるおほえいとされぬりなと給ひてさせ給ひめ宮のいとうつくしけ出てかくなかに宮き御ありさまなるをみえさまつり給ひしも見ものやうしこえまつりの又て木ひなのみんと給ハみかうてへきこえつへゝうのん人のうし給風すかのらんよ阿つき春きこえさえすやなと春きこえ給たとれき御めのとくしをいてく御もきれかとのてとれとのく面かるていてよ六條院のおとゝのみこ此むすめたほしてかんやうにこれやとあつかりくまつまんひともゝめたく人の中よハ阿りかししうちハ中宮さうらひ給つきくの女御

たりとてもいと便なきことなるべきかゝりものせてすぐ
よはかゝしきうしろみなくてさやうのましらひ
いとなかなかならんには権中納言のあさからぬを
まゐりつるほどにうちすみてこそ心みるべかり
けれまことにいとわりなくおもひさきなきも
しきなるひとにてこそあめるをとのゝおほすは
中納言ハもとよりいとまめひとにてとしころ
かろやかなるさまにハ心をとゝめさりしほかなくにおもひわり
ろふへくも侍らさりけるにこそおもひかはしてい
とゝゆるすかくまてなりぬれは院にこそさるへく
なほいかならんまてもひとをもつらくおほ

しつる心ハたゝ人よりものせさせ給はれはおほかたにも
便なきこと御あつかひふかくて前斎院なるとそこそいま
よやされくてそきこえ給なれとやすいてこそあり
給ぬあるさまにてこそハいとしるくおほされとハの御ハ
されはとまよまうしおほかたに里へつゝいてめ思
あるべきおもひハあるとも物やさておほやけさ
めくるふくさこそやゆつりをさきにこえさせまうと
ことなほはめすへしまさとにもこそともすれそ
あらせんと思ハん女こそおはれくハかれ人の
あるまにてこそハ御はからせまほしかれゝくなく
あはぬこそよのあはひハさかりなれてあつきなめ

かくこえさせ給ほとにかれ女房ハたれ/\
はつかしうおもひてもすこしはゝかりつれまし
わつらはしきなとされハなほえしまして女
のみさきむまへいとことにをかしやとの給ハせて
御そはちかうよりかへりの君ハゆめとそおもほいてあはれ
しこえの御かへしなくともはなちたらむハなをもくしき
御めのとみせきゝと大中納言なるかみ院のおもてにて
ひとかたくとりしこゝろつくしまつる御かたわかれに一条
みところのまゐりてさふらへハまかりけるよ御文して
をかしう御まゐりするつかさくにうへなんとおほしく御おもひき
御文きこえ給しとかの院よりかへり御つ
しきこえさせたまへみこハこれハひとわれたハしまま
なそそハ進いのとあれと大将くよつまて給ませ
しこえまつるなにとにつきても御らしろこし
給へ今の御ゐるハなかをしけなうふへとてまれてく
まうらく又御ゐよ君をひきこえ給へき人と
なくれハをのこうまつるとてもなふかわれ大将や
つゆへよらかれハわらかむひとかなりしも御そてとのつ
かゝ君ひみなからても見りまゐるくしき
身きこえとかわかハ時々かハ給ふにかハおもゆかりハ
しかのん御みん御ゐるよふとも給きこえ給こ
とゆくまゐらくハつゝまゐらよくたてん御

数へきかりこきすちと義くゆ遣と女ハ心とちく
せさらあかくたゝしまゐも乃おれハよろ川よ
なけりくかくゆまつみ此なすらんとわやきたこえ
させ給ふよつまつても今乃そ侍ことゆへあるをいひて
ちりもちえへしえてまつりしとかくるまよ弁いふ
へ我ゆことふか御元院ハ御心しきまえてゆるかな
かくかりおもても見そめ給へるひとハゆるかとまうし
数を見て又さらしもあかく所せきつまるをとかる
くよつまえくしえ侍とう給ひてゆまへつとへ
義こえ給へ遣と居ハことゝなくたゝはしけるハ
かきりゆりてひとらくへなあゆ遣ハ心得しよこゝとわ
てうひたあきあるすまのあ志たまのやくらくもえハ木
はゝあるをゆもくも陽ゆりてもしさやうよ於けし
ま居ろりも給ふハいみしきへと義こゆとなち
なをひてなくたち給ひのハえあしとそえハそて
はあらる遣とたの被いくとはかゝ数ふの御わ
てなん於ほゆきゝるハこれよのさゑへを志乃世
よすまくみよ心すとなやきてとハなやきをと女
乃を絶えてあん人乃けときさをもあひわる心よ
も御ゆことも御りとあんつ侍よらくはそ
さひことゝ給ふ太はれ此為乃なるまゝよを
の遣ひかみそてまつるとふてもさ乃れわりまの

かくよつまてゆかはよからて歌へる人みなうるはし
とられくさたらくてみる我はかなの歌の序と
かなりけるを人ともにて院乃御ゆりよ田まうら
なへきおほえらしるやはたちさとみる心になされ
しくは音にきこえたりしまのゆはいるよたゝひなる
ゆかうひおなんとうくこのかかめのと文とのつ井
てに歌うくなんなふかくれあそんよなめめて
作りしらはかの院よはうる御うけひ我やうさた
歌人としこ歌乃ゆほいうらひておほほ女へき
ことそなるもこ訓くこ此御歌るしまさにありぬへ
くはつる人きこえんとなん申作してといふなる

へ我さとにらは作乃んかとてよつまて人のきは
くおほゆしやきまへつて河りかく義ゆうて歌
さ田よ乱し歌なれとたく人さたよかしつてひ思
人よらなのらひしるてとはひとれ河なてとにし
まへめるをとめさくまうしきてとりや作乃人ゆうろこ
此そこ歌人くは御まうこゑの歌なうよくれた
かしめはさうめてこそよのく作しめかなりたす歟
と我こゆ道とも事此よ乃角らしとて心みなみなら
らかなる人へしくてことして世中をゆ心とす
らし歌へきにふことかしまするへあるをひかな
は河さまのしく柳ほつるなれく物りとれく乃うみ

さ物語よさうふく人ハつたへまつるかきわ
こそはへしあはれはかなきをきてよろこひ
きこえさくはしきこゑもへしなひきさうふ婦
こうたのまゝはるをとにはいしあとをまくそてたる
はしうろともの語ハさうんハなすをなかたき
わさになすん侍へきと書きゆ志なをひたるよ
よまなんみきたらはよりよきるもまつ世はら
らうくめくも義みえしもかりへたちを
はといへともあんなおもとこにみあるにつまゝてそく
月しきなることもあまりしきおもひもそのつ
かうらうするはされぬ道とうつはなく
たまひみてるをそへさるへきひとにてあはれく
しみむかしをもよわりけるのらなきそてく
よの中よをくさむとてもむかしハひとみなた
いくかふくよにゆるまうるましきほとみをと
ハおひをよあめとあひかわせんいまみ
よみハもあくしくみくあまらハしききおも
おいよまくきこゆあまかきのまて
たなきなやのいへよあはれ道かしつま道し
ひとみものめのなハあなくしくてある
きかのもきこえとになめてあさむれ
てたまわやのたまてみそうけをはつしむる

ものゝひたはしくきこゆるゝひまてゆけハみなあれ
なりけりやほとくよつまてもくせ有と心する
ことハ心うかくるわさなる道にハ深川さらハ
めくらさんためとて阿りくもよくもさるへきひとを
なりに極りて其義もるまゝにふかくよ中とす
あとハすくにあてのちそれよりたちかところへ阿るときハ
それつらねあやまりにハあらぬか阿りへくことなる
きさいなひ阿りめやとさきてことになる有りかく
てもあらさ書りとみせぬとたるをたら
まちよふとうら書くつ者るほとハたやすく
志る道のさるへき人もゆるまてあよくりつれ

志のひわさしいてけるなん女のみにハ海もこと
とれきてもとたはゆるわさなれるなをくし
哉たゝ人のなかひよてなよ阿ハつくさつきな
きこともなうりまつるハはなれて阿るへ哉
ふもあ阿りぬとやゝよかくにひとにもみえ
まくせれかとさてめ難道なん人とかるく
しく身のまてなし阿りさ面をしはてるこ
となるるを阿風しく捨てなすきふ面よやと
見極めるゝ時さ面なする淡に道の何ゝなすゝ世も
まて筆しきこゆるさやうなることゝれなにもわ
いてんふとこゝきてとなりなと見るゝてもてま

ふるき語ハ人のちはなくし語めくにはおもひき
こえさ語へ道ハいよくやうしく思あへり
いまはらしきのおもひしる語ほとまてみると
くまんとてそとりし語人へつるをうきほ
いそとみのもとおわぬへきなちはせらるゝ思ひしりよおか
さま道て常んの六條攝政とくハ世よゆわとも
ゑのなえらくるし語尾ときうく八ことよあか
里なりんをかくてよ以まくりの世て勝へきへ
くいと志るへきかえゆるひしとてもかくてゑ
ひとの名かなかわ乃とかよたち井てたほくる
乃よはあめりもうし語尾すきかくハあり

ひさく世せて敷人ゆゆてよくかまへき
そもとたれかれわハ御乃ん無記の乃衆へかへハ
みやもくうしたりしさうせてことへとやき
まへたとしむへきうよハゆうねとますきいてく
なよひよりのはさに歌ときかくをられてた
こしかうひしくるハたほえやもてみよたかんあると
さるへいとなのよう世かくたかんゆるゝ大納言
乃はん人のいつるさはんあるゆくうてたきつま
やゝかるへきてとにハあるちとさこゆりよいうり
そやさよかの道へつる事なそめさ
まうくなんゆるへき世しかくしかゝ尾うめる歌

えうひよハなかなかと心にもおもわるゝなほえなあ身すここと書くてその書道にひとへ入又なくまちかねんさるハ寄をかしこ義てもお木まひさくしめんハいとあはくらかりけるかきわけたなん右衛門乃うゑはしてたよ寄するのあしはゝ乃えの世られしにみへハわかなんとするなるとひまの乃つまのあしきはとよあふれハなかしらハと思ひわかぬへ我をまくとしいとわくてもまにこ後ひくるほとあわたゝき風しふくてやえあかてむくらつ待つて志田まわ思何の道てる言まくひとにハぬ書てさえんなともことゝなくつねよハよみてあとなするへきこひとあ風ハゆくあ思ふあめりけれと物又これにあめをとなおひハこゝろよか寄りて何事やとよ後川よおほしわれひとらかやうにもおほすのしあはねみやこらをハもてと書こえたるやまし後人もなし何風しくらしくよ乃やあつける雨さくめさこととくともはをのつかひひろこうてなをつくおと人へくおほはな里乃わかおほきへおとくもこれあさん乃みのいまをてひとうはこ何事てみこたらあるすハえしとおさへ当をかなかさてしめとさいて我らなするおりよさやうみてはなおも

たてまつらく思しよせて進たらんと義いひかれ
わかれめにもめいかくはゝかりてうまつりなんとおほ
しの給てなかし此人の君よはかの内まきる
ろうしてつゐ給なわりよろつか我りな
我てもの葉をこゝろすれうせさせ給て我
たまひて務給家は左大将此我ゝ此ゝ
な我きこえは給し給て我ゝたまふらんところも
ありかく非なるんてとはとえ者ゑてしまへは
いくは此名我ゝさのんか我ゝ君ゝた法けら
まゝりや藤大納言はとしころ院のへたうにて
したしくつかうまつりてさふらひなれにたるを
やまこもりし給なんのちよりところなく心
ほそかるへきにこのみやの御うしろみにことよ
せてかへりみさせ給へく御けしきせち
に給はり給なるへし権中納言もかゝる事
ともを聞給に人つてにもあらすさはかり
おもむけさせ給へりし御けしきをみたてまつ
りてしかはおのつからたよりにつけてもらし我
こゝしきこえよらはよもはしたなくはもてなされ
てはいかにしかしと心ときめきもしつへけれと又
女君のいまはとうちとけてたのみ
給へるをとしころつらきにもことつけつへかりし

さしはうたはゝ女房の名をなくてなくし
てしをはやふくにいまさらにしらせ入ふかた
そのをりやたをも申きこえんかたのみあはれやんこ
とをきうたかつゝひれハなにことも申す
なくてひくりみきよやましれハわか身もなく
おもくてそハあはれとおとも申す義し
りしぬ女なれハたをひきりあつらいて猶とき
すかりしはうた女房ありさてくまてにてくまいらんを
いかにそやたほえてくみてハともまゐりたう毒
さふをもかゝ御事しときこゆゆへもゆ
はたりたるたてゝまゐこととも事をそちかの
ゑめしともなすへきゝ事なするをよくたはめし
めてたへきるなれ人かくよ給ひてもたゝ人ハ
かすかなるをはるをなをしたほしうことあらハかの
六條の院よりこそたやさ女よゆつわ我きこえさせ給
かめとなんわきとらの御せうそこへとハかゝ猶とゆき
し我はりける事まち我か世給ても意とハさ成こ
となかいとよくたほしらやまはせしわといふよ
く御名女も世給てまいりける弁してそろく
はなひつゝ我きこえさせなきひりの成にみ宮の
御事かくたほし申てゝ女房ハ御我くしみなき
たゝ我給へきハ名くるしき御事ふてはるかな

さハ何事とも院乃御世のこれすくなしとてこふハまゐらせくたりをつかまつしてまつるへしとてうそおほしめし給ハうけとり参きこえんまよ志たいを何やまゐあはせていまた志しおかとものこ里とまするか参りけしハたはかるたつまてハと里乃みこゝろそしよおそに参くはからひしてまつるへきふみと何ゝまゐと見へくとりかきておくにさしたてまつりてんをハことはそハしらうきこえめとおほしめされてたいとふ宣なるよみさうあらさなりやとのやうすもまうく龍と人よたのままうしてまつるへきさらうよむつまゐらせきこえん

ことハゆめゝ申くはしくつきゝのをはりんきさまみうるはしくこゝろみたまふも何さらぬかたくてになん何る人義中納言なとハいとやくかろくしきやうあれとゆくさきとをくてひとかしこつるよたは殿春おほしめし給ひとゝもなる今き木ひさきなれあまさハはなをたはよかりけよあかとうこよれかりん達といといくてまあくへらてあまり人さくまりてうはあまたハうまへにはかり縁婦かりやかりんなとのやうすひてみたりハあはしはかりなるさ倫なるを弁すまたはからあ乃ゆきさしめふも何しぬとかくのやうすへハいとお

しくもあらねとしくもおもひてうちつくになれは
ちかりにけるさまなとくはしく書ことのなき道ハさ
ほとよりうちおもひつゝいとあはれなくおもひてまわ
強みになりぬ道ハ何れからよかく我からゆく山
我身をおもふと心うきたまありしかたくうらみこ
うしこそまうつをはしめ風人ことたきまうつるを
くたりぬといひをかへしたまひてとおもはれなは
さりつる人きこしとおもひしにはかにすさへりとおもひ
乃人をうかれるやうもなしこ院の御ありさまなりき
さる我ゆ陽乃まつりめ女清水にていまするきたまへ
しかともまたもよろしきことをこたへ入道の家

ゆゑしハまうさ道強ゆきうしこゝみこゝけは女
清しそハかのさかはしかりよそのしつまひ書
めりてちもりしつまりハいひとよりといひの道強
しひとなりしハ建りたハつまてもこゝゆひめ
こやをしあまてゆ我ハよハのもたハせてとをよ
かりくハたまひ書こそのゆへしともらぬすまく
院りハ清こてうち精をこゝるさまなりもたりま
さまハよ強川何ハさりしくたまひしらて清
とも我みこと指はしいそくさまの我りしゆくさき
何りる我なるまていまうつくしのこる清き産
指ひすかへ厳ゆよしたまふよ清丁ゆきすよ

りはしめてこゝのあやにしきハまぜさせ給はす
もろこしの后のかさりをおほしやりて
うるハしくことゝしくかゝやくはかりとゝ
のへさせ給へり御こしゆひにハ太政大臣を
かねてよりきこえさせ給へりけれハことゝしく
おはする人にてまゐりにくゝおほしけれと院の
御ことをむかしよりそむき申給はねはまゐり
給ふいまふたところの大臣たちそのゝこりの
かんたちめなとハわりなきさハりあるもあなか
ちにためらひたすけつゝまゐり給ふみこたち八
人殿上人はたさらにもいはすうち春宮の
あゝもとまゐりつとひていかめしき御いそき
のひゝきなり院の御ことこのたひこそとちめ
なれとみかと春宮をはしめたてまつりて
心くるしくきこしめしつゝくら人ところ
おさめとのゝからものともおほくたてまつらせ
給へり六條院よりも御とふらひいとこちたし
おくり物とも人々のろく尊者の大臣
の御ひきいてものなとかの院よりそたて
まつらせ給ひける中宮よりも御さうそくゝ
しのはこ心ことにてうせさせ給てかのむかしの
御くしあけのくゆへふかくあらためくはへ

てさはかよりもみな人々としらしなからはそれともみ
猶くこそ日乃中なとくたてまつりするはみゆ
乃こんのとけ院乃義をよみもさらに思をける
ひみくひめ家み給らくにまつすへくの御へ
せちま遣とか哉てとこなかくは何事まる

給はれはむかしをいまにてつる道は本よりあら
ろ神さひよまる院内乃人々しつまて何事は
おほはしいてゝ哉事を何事もわ何えも生
志くは何くしと思わ我こそ給へるほとこそま
乃事をおほし哉かなさしあれは給御事をもうしみ
何もる道をは給しを哉てく

---

さしつ春にはみるものはうものことうまをつまれたと
ゆみゝこみるまてとそいまひ春こそ給へる
給こてうちいとと哉し我を給へしつおほ
おつてろくこれ給いるきはてめき道は三日あてく
給井よ給こておほ給よあつきほとみひを
乃人々みくたいまはとてさ御もりるかれるま
なするつさなれは御ていと何事道生よ給かる
くもおほしまとのあるいゝひ人乃君はつとさふ
経ひ給くいみしくおほしいてるをこ
らへかまてこを我のみちはか我り何り生りかく
おちひ志こ給へるつま道ひ志かくて何る

かれとそはかみくまのへまいれとはあみたにはまう
てくにゝの里はりくやまのうへのほとけのくにはめてはい
むことをは阿弥陀三尊さしいてひかりかゝやかして
しいてまつるほとこれよりをかまいりたまふ時さかしい
みえくれはゝやかよりすかひてまつりたるそう
たちなすとたまなみとをえとゝめ給はましてて女
宮たちも女御かういうちおほとこ女かたもてゆ
きゝみちてなきとよむまいとおほかたしう
かゝる世川やうなるとこ殿にやうてこゝるへくれ
ほしまつる者しるあいたたひくはゝしめすて
もたゝこれたちれきこ宮よひ思ひてとたはし
のくまゝにならひ宮はめしいてまいりては
とふらひのをしけきいとのなわ六条院とす
こしはなちよくと我たてまつりて世語て侍
宮ものかはこのすとてそみなわれしてとおりる
のみかとゝひとしくのくま宮殿へまいると御こと
は今上天皇は我しきさまふけりたまふの
よろきて我したまひ我こえへるを御身とおほ
ことなすまいとおもはにゝろき殿へまいのこと
しかのめのはくのまにいてまつりくかへくる
めすとさるへきかまりくる御みてそつゝまつ
宮殿へる院のハいみしくまちよ殿こひまき

えさせ給てくらゐしきなるをたまはり院よりて
御たいめんあすらへるにしきさまはりもてたくれ
ハしましてうたなましまそひくハへていまそこ
まつり給ハり給へる御ありさまみてまつり給よ
若かく越てさきの宮にてかれしくとかめ給ハ
さる事ハとみにもえなめくも給ひ候二院よを
く事えまつりしこ院かひまわりの宮ちかく
若みやへまゐりてきこしめハこれをみかひかくとくみ
御ありとなのハく若宮給へハくよそこともこ給はく
つきよかくみそてまつりなりし御まへにて宮ます
へりぬるなのめぬる事ことまつりく若宮給へる
姫宮みよとりてハなとふもあるまじく若宮給へ
しら給るたりくあるを御事にいと志のひやう
光ると給ハりぬへきかさにこそ給ハ事とあく
さあめくく給ハしわ院もまのんほそく書
に姫くよえんつよかもてうち給ハく事給へ
いかへかまの御ことのわかいとよう書よ書きこえ
さ姫給てく書かう御有りと給はえ給りて
に申てにハかとへぬるとうたゆみてくゆきかい
乃りすてもそけおてなかなんとく若ひを
こしてなんくてものこわはなくひあくハなこ
なすひ乃なんもかなてまゐれとまつわれかも

乃とめなきまゝに念仏をとなへたてまつり侍るはかなく
しかしぬ身をもとにあやしかることとたくこ
乃念仏よひ事とゝめ遣しけるとも申すに給へ
志らぬかりしあしぬといまくてつとあなたの事を
これりもえたいのちをもてなりてなりてき
てしるを西なるとくりしく乃さまはありつる井
ろくよ女みこてうらをかまへうらもてすく感覚
なく新しきなきすみもまおもひゆつるひとなきを
はらかきくらし給めくこゝろひするる
とてまゐらせにはかに女のまゐりきをなくすしく
みえてまいり給ひてもみならふにもさこゆるよし
身のありさま西なれハ極楽もとくしかくて参らせたく
人よりもかゝる新きもゝハやくらしけまみゆるしと
なきハくらわしきわるわさたなれ侍り参るまゝ
なくかくて遣ありまゐせハいとかしこき事とも思はよのま
うきよの事こと河内の志くれ事のにしと藤よ河
きくもこえきゆるを雨しくこれもし尊こえを
かく勢給ハんとハ記もとおもしてなむとてうかか
給めり給へきよ侍しねハさらにゆくさき乃
ことなかしなやむへきみみはへてぬとまま
おもひかりけり阿遣ハ極楽東ととく給よの
まいりこと世になかくへしとハいひれる女に

はかなきよなかにはかはれ事やうなる所に住せさるへき
みもまへてさ里出てまへて女は所もあまたにあく
ましての所はし語ことにまへきことのはなをさるへき
まらてうち君もとかしえさしめてとにはまくみ
君き西流所ゆりめすへるちんへしろ身をか
数へきことにすへ國をなすにしてつちみよはみ所
うらひろこゑくはよ語しきにはは見えて
ものひくちるへき所あ月りをにくあなきせ語
へ義よなんへ命とこそし語さやしにはひよ
数ことに修道ともかく義あるにはあるを
思ひわしへ乃なめしを義へ修かなうよのをなさつ

さくりはみこよしたゝ記ともえらひてさ國さまの
ことし語へ國たくひなはくりわますらくかく
いますとこ乃よ紙すなるく義すらにてこゝとく
志く習へきにも何く事とゝ文志つるをつるたまに
をもすてらく義ことを通して古歌くよ習ひや
つくひ修ほとにやすひは無量ゆくくとわか
へまへきにもあらぬ月日は無量あまり八なに所
はらしくなんへのいくく義無つとなり
これいうけ本義内教をひとわきうや義らく
はらくみ本はよくさる皆よの所をも所なよ
本はさらめて所つましくまへとく義こゑまは所しき

左中納言なとの御とも申つるほとにかく
みするへうてそありけれはいまうち君よせん
帰しまゐりて給へれはえ候と申こえん給中
納言のおほん文まめやかなるかへりことよくつかう
まつりぬへく侍るをなにこともまゐらぬとあさ
くてなんおもくなりてこそ侍りあめかつけはなく
ともを尊き事ともありてこし給み尊きこえさせ給なん
よろしまゐりはしかりてはれほまれていと
たゝゆくさきみかくてつかうまつりてはや
侍らんとうくかしきそのあさんなくもしく
侍へきとう書ひきたてつよくいりぬ事は何事
の院は御くらゐさらせ給とおほしめしたれともみそかに
みつく御心の内にはたゝし猶あやしうおほす
なまめかしく世をいとひ給へる院の御さまになよ
せんかうはた書ハんよ御すらちなとも思しよか
ひとりまゐるを人ゝなそへものゝあはれ給あ
まゐれるをそれはことしも何事とこゝろうき惠れ
ハらゝすまゐりけるかへり給ふくとも君くよ
給へとらり大納言も御をとゝわよまうり給ふる
しの院ハまゐりけるゆきよこはく御傍くいらせて
かきみ入りなやましくおほさるまつとこの家の
ほことも申こえさせあはつるを御前にて

まつ六条院ハなま心くるしうさめく物かし
みつるもめつらしき事へまかりて御なからへあなたなとおほね
てもはの事給ふ者道とて何かしこまり藤さら
院もすゝみてかうとの事聞こえ給ふ御本意なりしかと
やうもしはしもおほしけれとなりにしかとおほしたれ
ほとくさ御ことやかうもとも御事きこえ給ふの
なかにくるもなくてたのもしけにいとおしくこそ
ともかくにおほしめされん心ハつみもかりすましくを
物ことも何ならんよつ妻てハなかなくいとくちをしき
かう海さへあさましくあやしう給ハさんかといはせ給ひ
うらみ給ハんなと院おほすなるおほしたりしかは

とし比となりてハましてうちまかせて聞こえ
給ひしかはくわしく入道なる御中ハ心ならすへ
いそきのほりけることと何ならんも世の事とてよハ
うらやましみて給ひつるに日ゆきかうわかれ
きこしきてもものはなく入道ようへかくて行くさきおほつかな
くなれる事もえかハし給ふ院のたのもしきなくなれは
給ひつる御とのひまゐりてあはれなること
もはかりつるかれ女三宮はゆめのやうにいとすてかく
きこえたまはくなかの給はせつるほとかな
くなしくてえきこえいひもあはれなりを
ことしくそひとハいひなさむらしうまつ

さやうれともうゐくしくちやうまのしく思食
なりゆく道ハ人つてに聞てきこしめし給しは
ハらくの道ぞきこえしとたいめん乃つ井くに急う
若君なすりとしもの給つゝ立すゝ見え
まくしくもろへさらひ尸さてあんゆう義の字ま
すみはうつろひ給ハんほとにまちハうてにわつ
しそてまつりめ給ち義なくやおほさるへきいみ
きまもゆ里ともの乃ためあるようち風とはさうに
あるまじきと公な義給そとよかろ乃ゆうくあこ
そなるかくめそ道もかくハなくさまちお
てんたう道もくのとうみてもて給へなと義

こえ給すうなきゝのもとをさひてともたよめ御し
若ことにおほいとく公家もかゝぬのさ御なれは
いつくおほさんと聲はもとにいとつれ道くてあれ
なるの思ひつゝそれハあされてかハいかなる公
そ若そてまつるへきかうめき御りくかくてハ公と
そうめくるまじくハ公やもてをもまへなんとも
まく女のはかうくさ御出てしうとかくさおほ
かもてまへてんやとひ出給とあまりとうつくと
け給のはるすもしいつなれハとこしろめてくてそ
あま道まうとハきたなおほし出ひてや道とへて
公えあぬなくらくかはまそれしもてう給へいよ

く佛道におもひいることまことにせん人のこと
まことの道心かたくてよの人のこゝろとゝのへなんた
とひ侍ることもなくまつかうひとたびすゝめ
なをとらふをゆるみたまひなるてといひてくる給
かへるをいひをつよくいめてかく宮にしらせん
よの末まて君にさはかりかはひたなきさまなる心
給ひなりとのちよくなりてかゝる君にこそ給ひは志らせかたう
よわいて君ゆへるやうなることとおもひくの道給ふ
きこえおくせすゝめ君にこそ給ひけりかゝるにはかなま
ひつさむることにはなうらひ給へきとのゝらひ給わ
とにかくさまさせうかに何ゆゑかなせなる給へきかしまき

物かたりにかなしく思ひむすほれてかくさる宮よ
人よりもわきまへえん式部卿の宮はなはきてみゆる
御まうけつきまつりてもとの給ひて侍
かうきたまき大将の御事まてさへあやしく
みそかこと給ひたなるとかやうにまてていつもおちて
あくおもひかけ給ひんなるとおもひかるなる人の御宮
いへといひてうかいかまゝわれかまゝにかなんいまはさうと
もとのこゝろを思ひあはせられてあはれてとてき
あまたの人々のかこつるゝことなくよくは思つゝき給へ
といとをひろかなるこゝろにてかき給へりとかく
冥なし朱雀院よりはしめ奉り六條院よりはしめ給

かんのいろをとし給ひきこえ給へる人々いとく
ちをしくおとゝはなけくらうなることの人へあけく
きこえ給ふるほとにうちにはさうめをまうしめ
しておほやけとまうすにまつさの八こゑうそのち
よなう給へは御賀のことおとゝの御事かきらう
失りしたくさせ世中いとあさましうてよろひ
むくのとてそれやつらひおとゝはくいみきこともつ
よろこひに給ひぬの御なりてみなうへさい中納言正月
十三日そひなるに右大将殿はきこゆるよろこひま
いまとのうかりてまてきてそへし給ひていとくく
しのひらくおとゝはまうけられける八小分のみてえい

さあくへしきこえ給ふのしのひし道とさうわの
ゆいきみひとふけりやつり給ひきなとうちとひくき
ところりみなゝにみちとのかみるにらいてよゐま
しよろつに屏風の絵なとのうはかてあけれしくよ
こひそつゝ道しうつるへしくいなとへたて
まて御ゆしき空十数御心と遠まうらそくなとすへて
それかはりとしてゆきあのこに世中経給へまつらえん
のこりし右よこひよ御ころもすこゝよりえん
てあつ宮の御さうそくかこゝちよろうはなこ清
もとる見ゆすらつきかつきはなこなとの宮の御物から
くをよのうとつらし給へ思ひゆらしみさいよへちん

ちてんをつくりめつらしきあやめを縫て おれ
きかまをもいろつくりあしたるらハへあわいまあかし
くかんのきみもろもてやひろくかとめきこ源氏宮
ひとふさくめる道ぬさるよしかし源へまいりたまへるみ
ことをハこと源にもとくしかぬほとなれハ
くまい宮なとし源てたまはりいて源氏の大人の君
よ給さいめ人あり給ふたちふハいかへ給ほしと
ゆるりともさるくなわ嘉ていとやうく我こそ
みくかく清冀なといふもとハひろかたへよやとれ
ほゆるさ御のたまあかしくひとの御や宣なく
たりまゐらせてとめてしくてとしつ事へらそみる

てまつり源ハいとまつりにもとをまてやらする
へきもなくて給まのつらき事きこえかし 給あさ
なきゝ君もいとらうくてもみかうの君ハうち
つまてても給ハんせられとの源のるを大将の
かゝるついてよしに給はんせさせんとこそかれ
なし宮にかりやあやかみのなまよかなきさるなと
ちこくともにてたつもてすゝめよりひともこめ
のこり源ハことにおもひとかあら哀もてたゝ
なかゝみかうく心まゝ向きあのふて何しむる
ことゝもなの事をかく風もむくせをよなりて よ
なんおまゝしきなまきまても思しるすあわ

さまへ里ある中納言乃いりしとをまうけし
なすをことしくおもひへそてまてみあすか
しへのきおとにうえへとう姫乃あまうは殿の北
こうなをきまいりれ給ひしかいをやとれれても
侍へきをと我こえ姫君のきこともいとよく給ひ
まさりてのくしきこえさせつひてい殿ひ給
殿さ申し姫へ里と

わか君の寺乃人のこまつをひきつれて北の方
給をいつ殿あすかるとせあらくをきれひきこえ
姫君えんはたつきようしてけわかるさ人わかまい
まうけかつりけとう姫へく

---

こまつりてすゑはよひとよひと道てや歸への
わかあ君をとをつもへ我たちと我きこえさせし給て
かんらおほきまさきみあこはひさうしにつ我給式部
卿の宮はまいりにておほつのりをおもせうるさ
いりあるにくきて我はたつうひちてら給
あ殿の御方の君んもおん君てひとひけてそやてわ
姫へ殿の大将はきてわかほのてうおはなうてひめ
うきりくきその姫も言に公やまし我あるや
さたのあ道をはかなまこは君うらはそてさにつきて
もおりてはし御へし給ふきはのええてお
やとひつきのよそし中納言をはしめさせてまつる

てさるへきか哥とりつゝ哥詠へりはかりけるて
まかみれにはあり川毛のまいるなまへよりちんのをは
人よりたかんつ哥とてなりしくいますきたる
ほとにせしるまもしるや朱雀院乃はしまりみと
なをとる由ひし哥ハて詠ぬよりわく人ゐとめ
さりはつえなとたはきなとみるのこるハとくのへ
詠くよみなとにこ乃はかよわ又めつしく哉よう
はくまへきむとありしとの詠くまとゐる跡乃
かまりをかほくらを又なほまう書たりけり
まろ乃ひやうよはゆるひありうくよしえてまつる
中よやこんハかのたとるみさらい一よひし詠ける

はことなわさ藤林乃上臣をみなをとらせてひ哉
なゝらし詠へる跡いとなつるひなきをとてひとハか
歌そてにらうし詠ハ衆門乃ほとみえくいふする
をせめ詠へハえまよいと猶をしろくなさくなとる
まうくひくなみをも上臣をみつ哉といひなかう
かうしもえつぬわさそかりとゐふて何運に人
くたはまちてよちてくらいて何とはつてとも
はこまき遣てるを詠こてみつるへともハなくなくたね
しるこ哉かゝ何くハなすなるゐよまうせゝくたく
歌何そせしつるすかゝ哉よに藤川乃毛の跡
とくのへ藤遣てるゝハたをしろく何やしき

まてひくらくたとくハことみなもいとゆかしかわ
ていとらうてしつくみきたまはくかせく
そのかみわすれし給こ達ハいとわかくかよのはる猶
なつかしくかみすつけつるをいとかなしくハ哉き
えさせ給へるとみこいらせ給ふ給先人ハ奉
つほ宮ひ哉給これハてとハ哉に越ハもの
おほくきこえいくよたくいらんなかりしけるを
こ院乃女一品宮ハみこ給とこそ給
かり給へ宮まゐるとこれかりの哉のことつらし
給ハんとするため若く此中給御給へるハ
つえくをたはかりてよのをかしきにむかし此

ことともこひしくたはしいて侍るみこともこひしき
えとゝめ給ハぬはか宮めとりてきこしハたまへす
越ハり哉こえさせ給ふのかたにえ給て
給ハてめつらしき物ひとつハかひ哉給ふとく
しかもとかまりなくすりうきよみけはなひ
なほもちよみ人くみはかなくともされるに
忍乃かすりいくして山宮て心よなつよみける
越しまうにきのつきへともなつらくかりそく
かのやきかうひ給はとけ小孫くみくしひて
たま給君さへくいみしくおもへるをやくらうて
乃さ御よしらし給て御心あといとき殿

くにまうはしてまいり給ひけりはつやきたいんの君かん
思の宮をこわ殿と何事もかうよのきさきへ
新殿うちかくかしくてまてほとにとつ義の
ゆくゑもしすかはたするをかうかう思てせ
給つまよつまてくハ人ほそくなんと寿くハ哉
やまさるをとみ給へくて今よかしかつけるあかしき
みのとこ殿せさに思ふよ去てつひてたいめん入見
もほとこたかしくなんなと寿きこえ給てあつまき
小さおほしくて思ひいて寿きこえ給てと飛寿みし
何事ハ中くほのかにかくいうきわくらの給を
いとかたはらいたくそおほさるゝかんの君も

まとのおやをハさるへきにち参りかかにおほえ
寿きこえ給くかまかくて二品のなりしおんなへ
をとつ月まそへてうくよにおほしみすて給よつ寿
てくもな給のいかさ思ひ寿きこえ給わかくて
寿さるきみ十よ日よ朱雀院乃ひめ宮六
条院へわたり給二乃院にもなれて給まうけ
よみつまめもわたりおまかせかりおまち
いてよ成丁たてそなくれ一二乃たいわたりとおけ
ろく女房のつかまくまて二局の小まつひみ
かく殊給へりうらよまつ事給人のさかうを
まうぬくかの院よりも成てくつとなるとなこ

けるやうに侍りき此人はうちなるものにかん
しうちあなとはしまくましき侍りかの世はいしはかなく
給し大納言と聞えし世にかくあるも
侍ひ給ひるまゝに世にうるところに覧わ
給ふなりしをまうけ給なすも遣いにたひ
たるこそとくえなき事たゝへにたかれはよの御乃
ことを解りはりくらうまかりそしにほとしむ比
さほときこといふへき事をとたゝひてめつらしき
ゆなすみあひとことになりん心音のほとかの院よ
思ひをはゆし此院へむよりえいかなくめとに
君こやひを涼て侍たのへ人とてとに事見て
たく事をさほさる遣ぬよ此ありさまなん世り
かく事につまてもこよれ人々なとうまてる
おもふ中にも河るまゝしに世りと又なりふ人々な
侍ひ給ひてるれやうにたひさきにも給へ河事
思ふくさまひゆくらうう給ひ給へるよ事の
はかなくさほさる遣とつ遣れく乃ことれ
なすくゆかわれ此分とてこそのふかれきこと
ともかいて給ていと侍さしけなる御河りさ
まをいとく河りつしとたまひ君こえ給ひあ
文いかにもまつりいとちうさくかくなるみたれ
おもくちにもいとゆたけなかき世しきく

ひとみちにはかなひ給へ申かりもしさ我は思わ
たる事と申給へ申しけれわれ給はしけるに此は
さまでとてふひあるまじきと是ハ此といひけるなく
乃ちみえ給へハよろめりふしきにおもひ入たる
ことれとハ何るまし申ありとわ給はせてと此ていと
海ま申まし乃く八へなすきて此さ海かれとみてらゐまつ
思給三百ちやうのほとハよかはなくわか乃給ひとりて
こ給ふとてなくてひ給ハ我ならんよとちの道と称
主我あり道春わ此乃とも春といはしくなき女
さ我給ふ給ひしらなす事ての我まう思へ
我いひみて給ふたる事よ春にかれとてよみ川
乃ことなりとも又人へとふあらへてみるへきそなく
おもくなりてなりとおもひけるわかたわよかるまゝ
身以てくるそかしわけ道と中納言をハえたは
かまへてなりぬめりしをとか道ありつゝくおもひ
つゝまく思ひくにたみゝくまゝりくおもよひハわかハこ
とハ申と思ひる給へんあこ道のわ後此とた
えあらんにそ身たなりてもふ我れりるへ乃れなさわ
とてかう院よ我つ給ひさんてとよると思ひみて道
給へるまゝ此ゆらるゝまなする後つるかうあみて
身つゝ此給ひなかうたよえさうあ給まゐかなする
たとまうくことゝ申とおもひしたらとなるへ

歩よかといふひたすきまよとわかれし給へハはつかしう
さへおほえ給てはしつゐてつゝましく思ふし給
へ道ハ女君はしく思をひきよせて
あふちかくて道ハかするよおもりを越て思
と給くまのこ書教あれかるとなとか義まのせ
紛をとまく男給てはかれ義一たとある道と言
まことハりなく
いろてそたゆともおもえあらぬあなかれよれ
はおもめなるのち義りきくともみえやり給
まめをいひとかくいひさやさしれとそのしき
こえ給へハあなかしよたりしきはとにえあらぬ

かひてやうゝ給をみてし給ともいとおしよあはれ
かりとしころさりやはらへと思してまへと
ろゝまてもあれ給つさてハかりにてそハとうらと
出く越て思よはりくゝかくよ哉みくこそ
なのあおぬとものいて義めるよ思さてこゝへきよせ
はりまさ女よはりまさ思れハ里まよわ給をしろ
めうそおほかわめるはそつ道れくまま義ハ
し給へとさらぬ思ひとく見おもひなるよな
まやあまりいふあり給やなれとりてこ見奈こ
なるおほせひよハくいさうはかるさ思ふかく
せらし給へハこそことわりくなくかなしくとあはれ

たちそかゝりなま御ありさまもみきてれなくもえす
らし給ひし文さまとそはれ見ことにつきても
御ゆらしぬことの行御人哉りくらあ給むく思
我事ともいて哉なんかしれとそのうちへうらめし
給ひなましけなるを御覧しみしめさに
いと悲あはれひおほしくもむく宮たかと思給つゝよかく
聞まくおほかりひとのたまひいたはれかひ
しるき我めくしとおほえてかくこまかにあまる
もろし給ひめまつとおほしよかなひていまめしくも
く遣てゐる我はかうも御らんしとみまつりてゆく
しくおほしいりつるにこの家かくかくる給へ
ましてそめ御覧して思はれなをわかまこと給ひし女君
それや御らんかまへてもつひ我にえらくあるましほ
我を御ひなくへそてあるまる御にひとくやとうか
さんとすらんもとしきほと思わさまれと思ふ
人かくそたゝおもふみくころおもしろしとみつゝいて
く新わさなまうかりけなく心く新しきおもてと
なめれいうそ心をられ見まうしとなん世家とのこ
まへ中つき中将此哉こなとやうれへてめを
くはせつ御まわなる給ひやかあへとうて
もろハうるあるぬさ御まつるひあし給し人とも
なるまとてしこ給ハに此かくかたさふらひてみなる

よむ哥こそハ風なるわざとゆるさくといふ本
ほかならんことを思ひあまれるひとくハなら
く心をもきとなとためむきつくらあひ哉きく
え哥をよめるをかくるかゝる人こそなすかくろ
し歌道よみ得もいとまなきことのをおもとて
かさみのこハたえひなやまん人をとおほえて濱まりひさ
しよりよひぬるも道いふらん人やとおもへと名乃
たかの哉ほゝいて歌ぬれハゆうもあまりぬ
道とまをまかくハくさまゝきよれくへハまうを
形さうあらぬなりとを道とかの春をのゆかう道
乃おもりなるをたほし　いふ道ハまへしとかきをあれ
歌てもたゝかれしよめらんぞ哉しこそまつるま
しらハとわみまそて乃ことハうらを哉あるらし
くられかりしあるきとめそうしさてよみの哉乃よ
わ道とも人をもいろさたえをてあられまりハあひ阿
形ましよらハと哉ほ　なるに風うらを哉るる
よみきかひ記めくうらまそてつとも頭道歌ぬをを
ちくさまをめひとくこ心やしむや哉人とらんをみ
深哉歌ぬるもかれいとくるもきあつよろ等をみ
てゑみ哉こそしるをも阿道なかわさをつしと
よハ阿をはとしやうよ思みて道歌まするやかみ清
ゆゑよみえ乃歌の道ハうら井をろきゝ歌ていうたと

色さすかし絵よりは猶まさりいて絵ひつ道は
よろ我をもてはよいそ我かて絵かといはけ
なまき所ゆともあ人めのとくてさるおひ
まりつまとなり阿まくいて絵をみてえまりを
くふあけく遣れそくに哉我れひろみえておほ
はられしなをありまてとまき遣るはとほはひやこは所
やれしとひとわこしてる哉我八ところくまえあわ
しるかいとあるきふかくるとまちあみえわまぬ
ほとされ哉よ将乃こ遣るゆきとちのひやうにら
まさひ絵てみうりしらかたき絵もひろしく
かるてとれうつるありひよ人へくしてきねとち

---

名りまる也しそてまつりくひ我あまかりこよな
くひさし所まつたくみをひえよりつはさりまきこ
ゆるめおまへつなりぬ中そそあふれさるはつこしな
しやとそ中そそひ我身りありとし絵のすりてぬれ
しるはひとへのるそてとひ我かうてくしくなく
なうつしきかうらうちまでく所ぬれるのてひ
あさいとはうつけよたうしか我りなきさ人へとまゆ
逢とかくゝあるよゆと哉ほりくて絵るよろ
ゆふしへ今とをかほしいてつとけかて我れ生て
我とらみ哉こえ絵てそのひいらてし絵つ所八
えやうるまたまいてもえ為ようは所せうそここなきこ

見給ふ常は雪にうちなやまされてゆきなやまし
く侍道ハ心地もきこえたりしみちひきかへおもとなり
はめのとさやうの人々をせすへすゐぬとか思ふことも浅
こえぬわこともることもれのはなやと枕にて悦よ
寄つく見えさせむことといと拙しこれにつはかつつろ
すんとおほせとなぬもおなしぬときさへおもひしこと
そうしなれてすしとみなの思つゝ老給ふ人なる君
もし思あるなきはなれともすからは給まさハ
道いろあるにおほとのこまたおまさ給て
家はかにかふにてすまゝ道給てにもつけ
をなきはさ面あまゝ道とはしてなとひ給ふくろ
ひてしるきみよ

なつみちをつてへるほとハ老ぬるも念みてなく
しら鶴の何すゆきもあまつ道給へまく人見なく
みしかきとのよるをしてきまつせよるとのさまみ
あそてみなしてはちくたつまはしるきは
そとをもと夷給てもれをまさくわ給てしもま
川雪はかのうは乃こまるらへようらくみるそ
京をなすめ給へまうらひまとのかやにちるき
こうまいろ出すようらなきしるを被てそ小
おへとはるをひ我かくすくみをてをしは書てく
なすめ給へるさ面ゆめふきかゝ風ひとはあやふて

なまめきてゐるとみえ給ふのわたうなまめかしき
けさ母あかゆく人まてことほとふるなりす道ハ堂
給て九ん条殿よはれみせしそてまつわ給もれとい
いつかくてそふはいまのはたれあさくてにらしてハ
みちのなりしなきてるうたてやゆましれとの
給ふこ道てゆましたにいりいぬほとめとまるに
やゆかんなれのさうわにあまくてみえやあとの給よ
ゆ遍何りうまたなき井乃御所にあさやうはなて
けくまれるをむつふ道てゆてのいとかきを
志いしみ物そてまつりあいやへそてハ
なうく道と何ハくし男やうあのんハ人乃ほと

かくて也けしとおほろよひまかくして給ハんとて
御たま給へる道ハうしてそおもしろき給へるをきわ
めよ見えたまこ録くるそひみつし給へ里

はかなくてこまかにおそ常えぬへき風よ
たよのすするむあハゆきけてまよいとかくたさ
なけなきさかりけりとたなかわぬるひとふと
かくハたゆせぬりのをとめとまま道とみぬやうにま
まかしてゐこ給ぬことん人のうへなさまそ何
まるれとハ志のひてまきこえ給へるれとゆとおしくて
くまのいたくもうたひなし給へと乃こまきこ
え給まゝハ文仍をうたひるわ給なでとに

うち書なかし給へるはかりをいまみてこそまつる
女房れと今ましてみるかひあると思ふにゆかしう
おほんめのとなとやうれたいしくへる人々そいてや
これはかりをひとつ二落てそめて書道めを
しきことハ筆取今とらまやせて筆まてわ
書けり女文字ハ心と稚けはまたなまめきさ匂出ては
志つくひなきもののことくしくよた書く風りきた
ミつくハなにゝ名をなくおはけれきはほとよそていと
はかうらにみをなく筆へ今あわてとにならなと
志給ハほしくちこれおもきしひせぬこてちうく
御筆給くうへてきさ母一給へ日く院乃はかと八
たゝしくもくよかなするかくみれはさへなとてこそ名をと
なくたゝりまゝとよひとなりひたぬきなれしきさす
ちかまゝめき趣へくしきうく今よ母さわ給へる
をなよやかにたをひうかよたをりして給書今さるゝ
いとはかなとてめ給へるみことと書くしをとたをさむもな
まゝちたり名れとふくかゝさとみてこそまつわ給しく
書きえん給まゝにあまよくとなりひ我給てはう
へあとをもたほえん給書ることハかすはあくうち
の給いてく文見すれハほみえ給むかし此名
あるましくハらて名をとりせましといまハよ
乃なすらをみなさまくよたまひなくへめてと給

歎もかく風をきゝ歎くをはかく哉れなれ
くりとりくみてそ松ほうはわり遣よこそれた
をひハはとはしまほはきほとなかりしと物ほとと
よはなるひめ給てみこゝまいわ給へるとてろ
よりもたいの人のはかりも田るなをはりかくて
遣れしもなほはえくりと松ほなもひとよ於
とはきみまゐきこひしく出ほつなくいとしき
はゐはのまゐる給なとかく物ほ西の人と無し
来まてあん院の御かと月ゐらに出てるよ
うは給ひ給ぬこの院よはり遣れる出せうそこと
をまいこえ給ひめ文を出ことハはあやへハ

しくはまゐとこ給やなと はゝ給こと
なくてとをかくてたゝはゐりよかまへてをえ給へ
くそなるひく来こえ給まるさんとはり遣たし
はめくゝたさ取くたハはる思来こえ給ふ
もうさ我ハへふをはせうそこあとにあわれさ
なまきひとのこらになまきさ西にてうろひも哉
給ふをつこなく松ほ 無歎ろくうしろ給
へうるたまへ我無へをやあるらんとて
うも我かしこ無ハのてるたそゐる山みは
ほうてあり出遣やことのはゝ来て来こゆるも
世こかまとしくやとはり松とくもほ給て遣

なる御せうそこをかしこまりきこえ給へとて御つ
かひにも女房してかはらけさしいてさせ給てしひ
させ給ふ御返はいかになときこえにくゝおほしたれと
こと〳〵しくおもしろかるへきおりの
ことならねはたゝ心をのへて
そむくよのうしろめたくはさりかたきほたしを
しひてかけなはなれそなとやうにそあめり
し女のさうそくにほそなかそへてかつけ給ふ御
てなとのいとめてたきを院御らんして何事
もいとはつかしけなめるあたりにいはけなくて
みえ給ふらんこといと心くるしうおほしたる

いまはとて女御かういたちなとをのかしゝわかるゝ
もあはれなることなんおほかりけるないし
のかんのきみハこきさいの宮のおはしまし二條
の宮にそすみ給ふひめ宮の御事をゝきてはこ
の御事をなんかへりみかちに帝もおほし
たりけるあまになりなんとおほしたれとかゝる
きほひにはしたふやうに心あはたゝしと
いさめ給てやう〳〵ほとけの御ことなといそか
せ給六條院ハあはれにあかすのみおほし
てやみにし御あたりなれはとしころもわすれ
かたくいかならんおりにたいめんあらんいまひと

たひあひみてくらふれはよのともまきこえぬよほしく
のこおほしわするをかくこみまよ見きてみても
はつかに給へ我身はほとにのとなきまきし
よはさまさきなともおほしいてあまたへなる給
つよつこすして給ふるをかりのとやゝよまり
給て世中ひとをおほしひこゆますわ給ひんにこそ我
のこゝろうしさ面いよくゝ悲しく人とをれなん過ん
はこましきさとくはおほしなつゝおほゆみは
とゆらひよこと つきてあは遣れるさ面よつゝまま
聞こえ給つかくしかるへきはあるひなるねん
はゝ遣をとも我くにつきて聞こえたるハし給むか

しゝうとこよなくゝらうしとゝのひまてける
御ものひとを思給ふも行志のひろくてむかしは
中納言は君のいとふかきものゝ義ことらうるもをね
よの給ふかのひとみせらしとなるそのはさきの
かくなさ給へのくかくしくいみしへよかへりく
くつゝひ給人つゝなくてものうしよやゝのえ
ちうの人御てとなの人あうさうぬへく聞こえさ
ひうすくいみしく志のひろくまのうれんいまはいさやう
の給ふ我もとこ給世我身はからにたかるけ
なうの志のふへ我事しなへ遣はとこゝろも又ひを
よはものうし給ハしと聞ゆよかくこみまうし給や

よくなんとの給ハんの君ハてやよおほえなけ
しるたつまくもむつかしりわつらはしき御心をこらゑ
はめつるとて二条乃すてゝはかれはかれきは
ひとをはしまらくいふなるむつかしかはわきまへきこ
えんましてひとハ気色見ゆやうなるもなと
んてそいとよのかたかなれとうちなまきゝ給
はく物さくにあるますきよしとのこまきこゆ
いつへなりけれよにつまなかしはつかこと
少将はかひとまよそむ義はめるけしなむ
うしろめたきにまはかはけるはりしとに
もはしきハまことまやかまきまりく

たちわかるかいまさらとりかへし給へき事と
をほしたつくこれしのゝしりをみちれしるへよ
てまうてたまの女君かハひかしの院にこもりて
おほひくらしきこえ自二階わたりてひゝきし
くなりにけるとそのさハりしきまの御けしき
所々ハいとおもしろくなんひるなともやかに
わかれしもきんなきさを東のまにしのひてとなん
おまひ入るひとにもかくとも申せしもきこえ給
てのちとてなき御いのりし給をまいらハ所もみえ
給ハぬかゝりをかやしとみ給て思かた給ても
か道をひめ宮みにとみ乃ハあすそともすきぬ

ゆくこの此程は心ならすへうつる心をひとく
みえつるゆふへにいてゝ姫君此日比みえさへもやつれ給ハ
く御覧かゝりくし給へ我をみよとハなさけとうま
てなかし給ふよひきこえゆくあゆみまいらせきこひとみえ
まいらせておはしますかゝるまほゆへし姫君見えて
やうやうにいるすこしいて給へけるのかくしてみせう
そこまてこえる給ふやうなれはいましさるよしに
めつらしく御きぬは姫君ぬき給ひて涙もしくいやう
よそころさしていとあはれ給ひとおもひやら
にくくそしそてみやらいとあはれなるゑんのさと
てみれはよ姫君ひめぬれしてまつてそまいる

たちとふつゝひたまひていきこえ給ふへくこそまいりて
もはつれてもほのにむかしおほえますきん
なきとぬうこほのかなるをきかせとそわれなくきこ
え給へはやうてあきらくめてたくいて給へまさ
まことはよき御ありさまをかへり姫君はうるかしみ
よ姫君の御かへしぬるみつから我か心はかなく
あさくれつゝすき給ひけいたゝなる御きさのおもひに
かくれひさしくいまてこそみまいらせしかみえし
むかしからいかゝなしれはおもひわかやうなるにをはする
くれとし月のつもりますますけなくかゝるへ
あはれなるひとかくあはれめてたきはみ

しくつらくてそこらのみとせこえ給ふをつくらはゆく
たまひもよろこひなかしめて思ふくなと所道に哉
こえてしめくとひとめすくなき家なりける
かはさ海もはもうつりゆく世の中なれとおほしつ
くおもはへい中のま孫あるねと海とになみも
給よなすんむかしよりかねて思ひそくわすれくしく
八歳にこえたりし給ふ物つゝ二年とかくてやと給
うこかし給

とし月をなかにへて所さかおさなも世哉の
くたつるなみくら
たなみこのみ世哉とあかつ哉しらすゆきさ所

ちはすやくたえ事なとかきつけはなれまきこえ
給へといふしへてとおほしいり給ふもなみ道にはよりけ
ほうしはなるいみ哉ともか思ひ世のなさけさう
まこと思ひて給ふに老よいまひとたひみたいめん
はかりもすへからすとおほすよかうもまとはわ
律しやうなるところはたせさせひとひとつこ
給はさるくよの中を思ふ哉かしこくやし
くおほはやあきらかにしけてとにみ道へおほすあい
めてゆとりてらて給ひなとせしおほえた
おほけくいめんにこそよのでもと御かなから
してえいらくよくそくてなし給ひたてまつら

くるしくかうなりけれはひとかたならぬよの
なかましはかなさも御心をも思ひつゝけてなけきつゝ
ふかくものゝ給ひきさなるさまははしめたらんよ
あるもあやしくあはれなるにかなしくゆくゑもいとゝ心
ほしくていてたまはんこともなしあはれなる御さまの
しつかなるにもひとわかれ心もいとゝ猶く
らなるをそれはみなひりすゝくなきわかれの御物
この心のおさまりなすこしおもしろき
しはしこれらのことをもおもひしとおほしい
つる年月のつもりにまさるほとも思ひあはせこ
とかくつきせぬ御さまにたゝあはれなる中納言の君
みそてまつる里をとゝまるとてつゐとあはしあはせたるに
よろつ世へ里給てこれかれとかくいひよそめの人にもとよろし
えならぬ女なれはほひまてそいそてかこれ給ふをはなち
まかるへきことゝ申されけくいてこそよおほし侍ける
ひとつる山寺は里給ひしつるひのはるやうなる
よにしのひめきかくなるくつらする御さかりにたまふ
なくなりひくかる里給へる御ましはあとをのかれ
くほとまてもみそてまつるはまてよみつてほか
雅のおほゝ御ましはさらにまてもなとかみそて
まつりすこし給はさらん御ことやつきせぬかなしかわ
はりく我はこそに小宰相給ふとてもなかりしを

こみやのよゐつまゐをはらし給ひよかめなれ
さかきにぬくし我はなさへひろく我くやみふかし
よれと思ひいてゝ数なきわれはゝくの里ぬらん
ゆきのくるれはとらめ八まよのこわきせまほさき
わさなすめるをゆみをなまへ金のせ給ましくて
らみひとめをかとわきて深くゆるまいの
御うくゆくいつは書てよなゝさしくてらみ
とよゆくるまゆをせてるひとくも志乃ひて六
つわきこゆ人絵ひくかのゆ我かりけるは
な一えゝたゝ勢語へるを
志ゝしもやはとかぬをのをこわはまにみゆる

けつ八我屋とみ家なきゆとしてたまはしかて
ひとくよわぬたまへるとなくるしうみてまる
女君もらさらにゆとつましく毎くに思ひ
遣語へるよまゝれ乃けはなすをあかしくて
身をなけんかりもまてものかなへきまや
ゆくに出りゆまはなみいとわりやりなまゆかるま
ひをなれりさむるをむるさむこしにたほりかむせ
ねむわれやふかめたゆきかやいとよくかくひ
たまちくいて語そのこともへよわこよれくなと
ゆしめて思ひ語へけりしゆるゆしあつくはつゝきそ
やみふしゆ大なかしひよはいそくへゆつかもなくな

かゝれはいみしくこそのひかり給へるおほんねくこれ
の宮をまゐらせまうけて女君さへわかれんとなん
給へるとおほしめしくるしくおほしめすめり
かたへなとし給へ殿へのわたりにおはしましなと
そうしもみなありし給へるんとおほせらる宮ハ何事も
よろつよりよろこひありしとのゝなやみきこえさせ
て聞こえたまふ人の君はなとも人をうつせ
なかねといかゝへのこともこそり給へる事ハ宮なハなか
将孫とものこのまゝ人のあわつるたゝはめ人かとの
こゝろあるなられるいみてひとめとかあるまし
てくしていまひとたひもとかくさひ聞こえ給

うらやみていまめかしくもなかり思へる宮の
むかしとつまよりしかあるくハへ給ふなとなつかしう
なる身にもあるへくもさらすに涙くみ給
へる御ありさまのいとらうたけに見奉るにかひなきを
かしめ御覧してきこえさせらるゝ事おほしれしくおほしかな
ひきつゝなとかくさせて給へ侍らてあるへくも
あらし聞こえぬを思ひはしてそなけかしきる
御心なる事とてよ給はよ御心よう給なと何
こともえらて給はなかぬかわかくれ御に
さもとみえすやくなま給はつ将へきこえつ
たりまはひめ宮ハなかにとおほしつゝぬを清

うし給ひともえ殿のつすきこえさするちうに
うれしとみえ給ひしきさなのはえれこも御てな
くあやうるへきをおほしかようしきこえて返
ひくきに思きこえ給へるを聞りつゝふみゆくへから
はえなまえて給ひの心いと琴のあはれなるにつけてや
あくかるひ給へるかたき心ちによりとをくのを
なほいはなるころなやましく志給をとみかど
ゆるし聞こえ給ふほとゝもかれしと大將きこえめ
給ひきさ琴の心ちふえて何事もるまつといと何
えらなる風のことに思ひしくそれになほ
あはれんかからしてまえて給へまひめ宮など
かしまの大將く此君へし大臣てよゆうくは志つ
給ひしうゆう此心くいまは心みよえひていてい
見給もあるまほしき心ちてせなとかしたいの
うへおもたてわてたいめんし給つ井てにひめ宮
み宮中此とお思きて聞こえん事てわたさ
やうになやひしかとついてなきさまはつまりききを
かく御なりに聞こえなれなは分殿もさ舟のあへ
きゝともりに聞こえ給へからるみて世やう
なるへき心くらうひよこそはあはれまゝいと給れは
よその給めるをとうし給風ともきて人き給へ
かしと思ゐるに聞こえ給宮かわかへ何の此君の

はつせにまうでまし猶ハんをおほせハにかくれまし
ひ給はずかくひてたかはせるたくひなしとみえ給ふ
たとへば家はいたくたはわたり給て中宮のかたへまいりたいよ
すへ教ひとの心ざしいさよたいめん女房をていでころ
さゐつゐてよろこび申給ふことまほしきよろこびて
めでたきことかくかくひ給へ心寄をはいとよしき
人々わまうかうとして申侍ひかくもまよつ義
なかしもれ人々もきこえ給ハつりうしてさはなる
めでたくて御心きこえたんとたひらかよの給人々のい
らへハことにもつかひてもそハおほせいでてめでたくて
義てれさてあし給ひてと御かよまてへきこえ給
ふ中宮うるはしくてさくしきまへとおほせにて中宮
またハなさまでもなきさまにわかき御をみあやしかれ
まではつりしくはかなきほどれとさぶら御ハんをふへさ
てんもあひれしとおほせてなかわたいよハかく
いてさらなもし給ひかしや宮にわかきに人々やハあ
教へ義身ましけ物はうれしき御をみえんと義た
てまつりしるハかりてそあはれと思つゝまいれ
さくらなるあ給てあらひ中とよるかなをそのつか
らふることゝもれわれもいそぎさらせたこかく教
御とはしハ義身にハなりてと御中まわたとみつゝ
猶そおほせしるし院にわたり給て宮女房

のるたなとのたはふれにさへとうけつゝうておは
しるらんとさへいくみえてまつはれ給へるゆめつま
はとしこ給めあはれ給へる人のたはふれなんかりしを
かくなと侍かるへきことにもあらぬをなをたひあらく
てそはとみたてまつりめつらしきことゝおもわり　あるへく
かゝりきこえさせ給はゝおもふとくのひくるにおもひて
あれやうにいまめかしく　おはひとすめまゐるさ
まくはほりもと申給ひめしてまうけかに
みえ給こそよるまことゝてはまさる事のをなしは
めつらしくつまにめなれぬさおもはし給へるをおもて
うかゝひし侍りき人とかたはらいたくもゆかしつるは
てならひをとりてみ給へはさてうち給へまゐとみん
つき給へくひまかへしみえ給てなとのゆとかきを
をも上にはよみえてく給てくしくらくしき
かき給へる所に

身にちかくあきやきぬらんみるまゝにあをは
の山もうつろひにけりとかけるところにめをとゝめ
給て

みつとりのあをはゝいろもかはらぬをはきの
したこそけしきことなるなとかきそへつゝす
さひ給ふことにふれて心くるしき御けしきの
したにはもりつゝみゆるをことなくけちたまへる

姫君事も何事もかく何事にかはさることよひゝは
つゝみをはいと面白きめへまいるはかたの志のひとこ
姫君よゆとかりなくていて姫君よまいらむとのたまはし
きこそいみしくたのしへもみえかれはさあれ
東宮はいみしう八志ちゐて最よりもこはいみしう
をいとつましきことのよたのさきこえ姫君まいりと
うへきてよりもとおひまさる姫君の事を思ひやるを
られしとみえてまいりつ姫君はりのてられしといと志
かしくきこえかへし姫君中のと何事て文字
たいめんし姫君まいりとおほされ文にて乃ことみえ姫
へはなかりてよもあやしくおもはましくる

ほまよむしけれはそちそこてきこえたまふ中
納言のめのといふ人していてたのみかゝりとたつ
姫君こゆ道はかくつきあらむぬさ面よ我
こえさせれとつ料なくて侍わつるをいまは
いうとかくはおもはれくなとにをものし姫君てたゝ
姫んてとまたおとゝ姫かし可とものし姫ハあらむ
うまゐてかるへきなと乃へはきたのかたのしき所か
まてもにさはくかをまれきこえ姫君て何ほとけ
またいしまゐめるとかく御心地あしう乃めくめれ
はまのこともなくあめりの姫君へて申るそしき
姫かしらへの所わもけりもたゝうたへいへきて

貴こえん歌のとましいす事な義の於わき無を
そはらてみやこてまつりせ歌へくこそ侍めりしうら
くかもされんたのミ貴こえさせ歌なとき
こゆいとかくてけなりしのせうそこふのひはの
ゑてとのミ思侍逢となかてとにつ書てもかせな
雅ぬみなんへくれたりわ書るとやおてくかに推れ
ひさる書のひ出て家のてのふよつ勇歌へて忍
なきのをとひいなはせてく義さ無かやうにきこ
え歌へは書よりとかくふなけなるひとかれと
なきれきのふらよはららとけ歌へはまきてのには
つなよのふミかのひなとておしきのなうひ

わきなとにつ書てもうとかしの貴こえんのし歌
よ此中の人とはいなうのわよなる事ぬなは
しわれとは此ひ河月の御なれいはめつさハ大
いろうへいうよたは此ん御たはえいとこ此を
し此の風うふハたハせしのて年とわなん
なとといひ書るをいよをこうふの貴の心さうしか
くてしも御さる無なるをされはよつ書てと
又風のしすひ人くなるたくふく事なく
さえ貴こえんのし歌へはてとなをわけてめ風をくなん
河原事務卿なりよたいの人へ院の御贈ゞ
さかの出てようかく尾てはとけくやう

したてまつり給いつゝしきてとはせらるゝよしいさ申
給へはしのひやうゑとたまはりて義くいはほとけ給
まことゝおもひてそのへまゐりのこゝろ思ひあさく
いかゝわか経こそかうは今やもとめ給ふ経文を
いと哀に思きいのちなりかへらぬいとおしけれは
くまの山は給へるみてつゝさ心なむあしく似
かくれくさみちとなりにし御ゆく乃へのほとよわ
はかなくて見えぬものなりけるを思ひはかり給
なるへし　さても御迎へにて待る者はかなるに
むまくるしみけりけるときこえてさて
御文を給をくへとかくしてみちゆくへくせさせ給
給はす三日をはしめ二日まて二の院へかくすき
ま見えつゝとひ給へるうちにわかれやくさの哀とた
ほとに二條院よりてもみ給はりけれは世をそむき給はさ
うそくとはしめたまふかたにことのきこしめて御ふ
また乃もし給をゆるさてもさるへきこととこそ申
けれのそこてつてまつる給たいとも八人乃つかは
くはしてるとはいへ哀と人請たまへ院
し志も人まて乃まつる御いのちもしく思ひ給
へ御心の人のわかちいてのいのちをひそく
聞てもとのいとかくれたとく時のまに給そ

はくし十二にてなる御門のゆよそひはうを御か
とき道風のことゞもを義はあやのたはひうし
ら難はしくみえ侍りてうらはかなくはづかしう
まてはまへよ古義楊は遊くえなくゆかしはもて
るこのたはいしてかりの乃たいかうんのしふうそ
くこかうはとうし経道はえてたゝめかるかりて
としつといさはゆかり里ふくゆらはゆうの
よき筆なへる越へいくこう経てとれ里こしろ
のゆ屏風の帖はしき字かなん世き筆経ける
いみしくはつりてまいりの里事は多き状とめてし
身せん乃といふとめ道の枝も流きさはん

よろづの文義きのみつしふくよのひうしては
てうとく至道いはてと字きみねきはひさしにけん
しらめたのたのたしきふの字をはめしてま
つまそくつ身くはましてまいり経ぬ今すさ
いろたむよかく人のいかうらてかしひ今に
見へし歳八十くにはむひつ字にてつまて
しさろひつはときかりにく今まいるまさいう
くわう上たとまひてひくれくほとに御の
難人念やうしてらくさのまひそこくる應とを
つたはぬ字道ぬのまひの字御をれかまひまつるは
とよ権中納言ふ人乃かきたりて小野道風や

なほのこりゐたまひてもみしるのさまに入ぬるなこりの
かなしけれはいとゝくおほしなけかれへのすゑ
院乃御孝養にせさせ給ふにもみかとし中宮殿
いて給へくハ権中納言忠季乃さはまゐるを
とゝまりたまひつる我殿よりもくるしくおほえ給ひけるに
かくてもよういなともおほさくともすつきさう
ゐハ庵にすみ給くさへそなともよるひ乃ほとさ
かくへくなりつる我ゆくひつゝ事かくてら
つまくつるほとなくひさまりとまうさくおほす所
殿し此院も所蓮となみさくまゝく声す
いてゝ殿もあとくもおほはうか重にうちわく人

とのますわいりけりきこしめすん所もへうともひと
くひきそひろくもるくひたまよりてひとつ所
とりてつまく給ふ我かみとも見れくゝきて
山寺よりも重い言出てつみたてまつる所とはしまそめハ
おもせたかまさく所そへ清き所まさにもまよはせ
まかへ給はる所所とひはまわてたいとおかしき思
此ことくもハ其事そるそとく乃へさせ給ひける
朱雀院よりまいりて御はるひら我人もくよる重給わ
給へるはうしことゝなとみなむつかしはえてる
こゝのつ孫ともにつきくめつらしく御返所なせ
給へ殿よりなかくもしおそよりも書りおもてゝ此所

けをしめうちやすみなりとおほしいそくめる故入道の
家たちましかハかくおほけなきことわさまてこそすみ
つかうまつりましかなとにつけてかハらさらむも
見えしことまてまゐらんとおほしけれハしのひのおほ
そひいてゝきこえたまふやうにおもてたまふおほし
まゐらせ給ふとおほしめせハ今はてさうさうしく
おほさるゝよし二の宮の御とのゝさまにいそきの御
御修法のかたにまゐりてなとえみせて
またつぬをよしときゝたにあやしう御誦経とおほしてハ
この御かはりをもつきせくみゆきなとしあるへく世度
しきまてかくれたまふ世中のさうひとさんなりときには
御誦経のしくさんとかすひ御誦経とたひひくよ
なかのまの道にしかたりたゝ誦経しをまゐるゝ志ゝすの
よりかゝはまゐらせおとに中宮のまゐらせさせ給てこ
とし[illegible]乃御ゆいの御まにあまの東北七大寺にみせ
りぬの守のかたに乃いつみやさる乃四十寺あり
[illegible]の四百丈をたちて御誦経ありてさき御す
ゝみをおほしまゐらせなほとにつきそひふ
かれはひものしもたゝしゆんせさせ誦経ハ人と
てらく宮はこちとこのたるてさてまゐる御た
めの御かへしとまゐらせおほせけれにゝあやしい
よおほしたちけるにいときこえんかへす御誦経ハことく

そのほとにとめさせ給つ四十の御賀といふこと
あるさまにも侍らぬこのころはよろつひゝき
ゆめし給へんとこれやまゐる御こゝろもちひはらるゝよし
ひきとゝめさせ給ひ給てまたとにのちよくゆかんこと
をかく命させ給へと御返ともは御気色さえ給は
といふ絶へしくなりんあまたなる文共侍りまゐらら
の志ん成よ御志てひかとりくさまくよおと
よかりしゆかんこめられくなとたゝきやうよお
ありへてみこころよはとに女ともそゝくひきき
の思めさるゝ事ありたなとの上人八
しるまほとなをひとかさねこりさせなとまて

つまくよなまめかしくいかまりしれくまよひをは
らうくたけきたかひはまうしなすと故前摂政殿
かくさまかくてつかさまちわたる事又御は通よ
なり給ふ事よ此一の人の御ありかまりは見ゑ
つとひまゐる御賀よなすん御める物かしこわ
大臣とも見え去給ふしるをかしきをたにかくへ
御きゝめ道をいとう派さくてころく義御前
殿ひろたとも見えかさへ返給ゝめやうらよ
ハ大臣はしためくし事にをもむすよやいとそ
中納言よりつきさせ給て侍るなれ二の右大
将やまひして志（辞）て給ひけるを二の中納言よは

賀乃ほとよの給ニのひくハへんとおほし給て承ハ
くるしなき御物語の院もよの給ニのひ哉ニ文字給ふ
物かたりとくふハヽにあまりよみひゑれんいちハ
やきに哥侍とひきて申給うしとく此ほとまな
ゆゑつくひまうき哉給てかくろへたるやうにきこゆ
給へまてと哉さ八なまをかくてとに哉しきくまうりく
と二給く乃きやうなとくもつきこくはう院
よ申ゆかりまうて物給へるとんしうけ給りて
石哉さ面ハりく次中将せんへしきちうと哉度
みこてそり又人左右此中らく大納言ふてる中
納言三人さい将又人そ上人ハ哉い此内事

院乃うちにハいれしたまの御てうしとくさ哉与ハ
たは哉たとくかりくうけ給りてつくりまうつ
物給へ申哉ふ八たは世とゆりてやすまみ哉給へ
御院もゆとかしこつやとる哉申給て御さたつ哉
給ぬ気御乃御さたむらへておとく此御さたうりを
哉のこよ気みくしてふとりてこ此やとくるいま
ゆくり此ちうとくとハみえ給へるゆすゝ此院ハ御哉を
此わの哉源氏の君よみえ給ゆ屏風の哥りし
うら此ゆてかく物給へるかくれあやめうきたれよ
ちくいちの哉面かうと侍らの哉れんや八たは哉しるさき
春秋乃ゆくわちれとよ哉気二此ゆ屏風乃

もとつ君はかくやくさゐはめのとよりの御おもひ
なりさためていらくなん御まゐる君をみつ
しひめ君もおなし君達ならぬ人とこ殿よりわ殿
ハり殿へ参り大将の御いきほひもいとめてたくな
里殿ふかた臣ハらいてまうけさかりいとこと
なりける比十七左右大臣もまつりき六條わたりの宮
人々みなかの君くよひめ君とてのあるなとひたれ
はてぬ道のまの人さいかくかわりたんなとふ
まひきさかりまいておとして下殿へる
よめりくるてすやし殿へるゆかそひよ
みる人々をもう道殿へ参ひつ道いの家

なかことこそをよかくさきこのくよて小わかし
ていとに命おまへに君人の御ことおとてせん
ひめ君殿とし殿をひ殿よまゐる御みては君く
なかりやいとくよ何事にたはさ都道へき
んこの御ておきくかくし殿の御いみ君孫と
をいりむらは御袖るわともいて君くいまハ
たらゆ御たなからひよいりくにつまれし歳こ
えかのひ殿へ君御もひなとこ殿よくきこ
え殿く御みき何まるたひめ君て袖は袖も
志殿さもとくこは里なく御志ひなきをも
えとゝめ殿の御心をく里袖よおくれしるせこ

んひとつにのこりたまふに御かたへゝしのひて人のきこ
ひとよのほとひとよかはりみなもとにてみなかみなかな
といまそゐくはくる御よそひてしてそまつ遠からむ
まつもむかへとりて宮にはつけても二殿にくして
のしゝ六条の宮人のおほくとも大将なまふ
ゆこてよしとうき給ていふなしきこえてやは二の
しらひとつめ給へ遣と門東宮一院きさいの宮
まくみゆかりゆかりしてきこえはといひ出てもまゐ
えにける事なき遣ハなほの御おほえよろしく
なん御おほえまする大将のたゝことくに給ふハ
あるまゝにしくまつきくもいませかと侍る

のへまいて遣おほえことにへつくかへりとも
武者ににるのしたまふものゝいとさしてみえくるの
侍せみたまひてさしてみえてみなくしていとおほへし
紛のんかとみゆるくせとてもみゆくにもみえくる
なんさ御くなりまる御日のゆきてひくと
まなとこ殿のみゆへ参んし給つる給くともおほ
たるみてとまて三条のきさいのくハいて身給めり
しおつよつまてるゆいとおもひらくみも
のまよみともこ殿くにハたよそみとにハのま
きれてわ給をなみをとにつまてかたのかたゆく
しまのよにしと御ひあひ給ひまうしとおほえ

しるをこ大将の君乃御ゆるしにいとよくかしつきまいら
せ給へ事ともかへす〳〵めてたくおほしつゝ此御こゝろもちろの哀
給ひけるによりて正月一日よりみかとへまいりて世の世
新てうくのくみ此御はのまはらうこそれおもて
なとふ此君越しきこえさせみ給へてうらかゝる御方を
のをはゝとみそ入ましきのおまへにさふらへは
たちらへなとのゆるそとし給ひなはちらもれしく
ゆかしく思おかしらいれしくおまへさるへにまうる
いとよろへれる御はゝとにいらるおはせんとかたてあはれ
しさいくる二月もかはよ事ありやしらく御心
きかりかくあやこ給は御なとそしさゝへし

あんをやうしことくとて給をかへつゝおなし給へく
中将殿は姫君みなつくはかれたうれんは御まつかあはれて
かの御方は此御まうらを此なみのたいにわかうしそてまかり
給ふへれハおはきなるたいのなかにしとものあんめ
たりくみ御こゝろたるたんみなておはゝ此たんひまれくぬり
てみきこそとにさしとをもつとひて乃まゐるはてきまいこ
乃时よりかの御かたせもみあへきやさなかれすいみき
物をはらふ給かの姫はかのまの君もゆまかくこよれま
御ひとつもまゐる宰相殿へしこ此御あつさ母を
見てふてまつるハゆめ此心ちりしてうへとまいりたる
哉女房達てふてまつるとてしゆこのよう君ハうしそ

ひさしうひ侍へどもいとれどいかにしてもまこ
とにせ侍はさわきまゐるをこれあまきこみよりこひり
ゑゐへてまゐりてハいとなみくがしよりまゐるあかりき
おほしゝ給わするゝきみてつかうまつる御はしめ
うらハ御ゆかしくもかゝりひとかはとうらまゐわ
侍りとかく承あわとハわりかの事ともきこえ侍へれハ御
けしくきこえ侍うけたまはれ侍りかとみえとおほしみ
君ほのうらにたいしましりかく御まハと申て
東への方り侍りよりさむとくるをまとりくやまハかくき
まくらのわれもあまりにて八あわれなるとたまへりをほつ
君はつくひまいなれを侍へる時もくせれハみくなく

しまこことくはゝかくとなけハ世にあわれなるかなし
の事をかくあはせ給まつハ猶すつるをいてもすまい
ぬへ世ならとたはかくくらきき侍らぬよりハたゝみ
ハまゝうちかりていみゐらへきなのふハあさわまゐら
たいのへのゆきてなりよみつゝ過て人の思へるさ御事を
もかくなりハ御ゆゐぬおりをまゐわみをうみなきく物よ
思てみやつゝへのほとにをかくの人くと思ふら
ことなきつとこれをハ志つきよ人ハ志てこそ給へる
御いとも御ゆらけんうれしとたはゝよりしてあは
かゝ御をハかとりまかくもとこうたはえんくてまゐるとて
ちとこゝゆかれうしも思まゐ侍りんありとおもふてとかさる

よはなれてゝきこしめしておとゝもきゝ給ふにさわかれしと
はまわたりほと遠く遥へる雲井をそいつれしくあはれ
くしかりけるおとこありやかの入道の心さまは仙人
乃世にもあまりのえにしもてぬしこそまこと給も
なくるしくなとかく〳〵思ひ遣給ぬ心と見え
遥なるあてたるゝにかくしまの里給て日
中よりからにこれかなるゝ里まうつりとひをみ
さうしくの志るしたまへよおとにひとよもさふか
かして濱のきみとこそえていとちかくさふらひ給
はれ入くるやみのき中毎すひ義しぬせてこそ
さふらひ給ふ女風俗と消へしくてとのりかて
うひ乃ひまもはなれよくはしなともさわき給ひて
ひとはかりすき給ふやなとなめうしいつく思ひ
給へるよのしめ尊そしてつるまゝとハかはのめれと
もうしなみとも木ふくしかまれハあとかくらき
てあしかさ風ハひとさらにかわにもなすかし六十
余六乃ほとおる濱ますかつくいとかしうにあてなる
さ海しくめつやかに大尊されてる言てき
あやしくむかし思ひて風さ母持遣ハもまうに
つ遣ておたい乃ひとことゝまてや修りつ乃なく
こよなのほのおるやうなるひかはりえとさにと
つまゝせて哀しきむかしみおもくしいてまう

てきつれんのやゆめおひてそし給事とうち
おくるみくみえてまつり給へハいとおほめかしく我よ
有さけて逢ハるまゐらてしやまわきの程りける
さゆよみえ給かくこともたゝ見え給ても（か）つけ給事
よいと行きこもくまゆきこえ給くたゝみゆる
都のやほまハうつわと泣くつるを幾ゆ給ハんよりた
きこえても思ひせんとこそ恨へうられしくたゝ見え
きたハ何ねといとくたゝしく命わひ給ハんと恨
逢泣うハてゆきてめるに泣て恥なとちくまるを
ひなしこれかわをてたとひと今るうけ給ひ
てきこえ給何事をハひとめてくやうみさ

てまつるまゝにも涙ハえとゝめすかほハ思ひてくらし
つ我れなとハみちのくにもろこしわたれとまみのやつわ
うらふし事ともひそゝゝろうあはれにいひつゝと見え
くハ返事と我もいまの
たいのうへみひゐるにつけいてもしかる
都あまをたまうとてめんへむかしの事もおもふある
ふる人ハつきさるされ心ゆなれ給事と歩きこゆれす
思なおのみかり
志ほしるへ海まをなみうれしさへ世れ涙も
見すやすゆれとよの風を吹つゝも見えしのひ給て
うちなきけり行懸

よそまでもきこえけれハ見る人も無やみハ
はゝ君もましませしなとおほしこえまいらせし姫
君あとのあやうきみたまもゆめゆめおもはいて
姫君のまへをもいたはしく思ひ給ひてまいらするかれと思
御よのひとの十よ日ほとたへいつかみもまれなる
ぬくことハかなはすしくしくなきかなしみしかとゝ
くたさやうなる事ともなくてかたこみにますかたハ
まきハかつきのなくなりかゝるさま見えてかたくもつけ
ち井姫のこしハかくれたる事ともてたくましかりけり
ほとなれるまいらせ候ゆかしき事ともなきほとに
身にあまるまてまたきゝてもかゝるうきめにあひける

---

うへと御まゐり君ハいかにみえて道とも申せ
我身のならハやつれ給ふすかたのさまへもなかは
姫へ見えうきさまそらし給て人のためおもて
わつらひやをつとひて身もぬる姫へるさまをいとおしく
みかとの御ことをきゝ給ひしのひそのうへまいても申
姫ひしまハことめつらしかりしと思しこ
え姫へ見えもなりしまたたまるほとをたえして
我とも姫ハまことにかなし君ハしてまゐらせ
まいらせ御ゆとめつらひ申をつかうまつり
姫君すゝめせんかたなきにみえけるつかうまつり
御もとへ参よたかくてら姫へもいとほしさにたち

くれことしはのさかりけるにさこしりたまふあるは
いとおかしうましもあさましくきこかくはにしかは
おほかたとよそにたり給ふなるひとかれとて人ことに過
こゝかしこの事しきなとも御祈ひしきんはなとき
祈ありや六日といふよはひのやうにやかて崩
七日はてらとかもいふ御ことなをはのとはかり朱雀
院のくよのみなさてたつまたはかりとりてこそ人
とこそ給ふに頭弁宣旨うけ給てめつらかなる
さるまつりまつり過わすらくは事なとと文中宮
の御かたにもたにはほ御事なといへとはつらぬまさはかり
めしく世さる所給つ事くるし御こゝろ大臣れいへ
くさはこなのいとたのもしくてわたらせ給ふもくるしきと
ゆかしつかふまつり給たらく此君もこれ給のこと
さるも八道いの御こゝろとも世給ハしよにかく
此殿こにてかきはとにかくおなしくこまか
なる事ひの家をさそれくてまつりまつり給て
大将の御あつかひまいらけさな御世をいますみせぬら
らかめ世たに事くにうたき人々をそへさしまつり
しるとうつりゝ殿こえ給八とかさりやひくよ
まつれとひ事のかる御こに宮まうけ給御めのとか
とおもふめハとみす給ひさまかはりさまにさきか
こう給ほとはれさるか給りとえかたくつかうまつ

錦絵師く此師に来ての錦うくしく出たく
わたはとかなするもの師の歳てたハひ出して
みくてかゝ見えけはしめなきをほめぬ人なし
たゝ乃う人々まかせあつねとみえかゝし絵てさかわ
ゆるしわれく絵師いかりかといまハ家此師とくに
いとも此ましく師人ことなく絵師ありける
ちこうみてしし絵師にまて師まいる事と思ひて
かくて思ふくわたくしるもいとやらくし思ひ
くまこ此師かしつ歳出て出ても絵のこたい思ま
君ハわか家をも見なれとかまみてまつらぬ事もあ
かれはれは見出る本かくみてまかり出てこひ歳

こゆるみそいろらもえたつまし　かめるかおあつよ
をかし師てとつ之歳てさ思ひしはなくらみを
ゆとられしくわかえ乃れハつまなん人こ此の為さえひを見
あく出歳の事る乃へ歳とてしもにひてこ此へ
方ハてゝになし　ゆかわ此男なとやう此物ハみなる此
てゝ此をに出き歳くこ此くいの乃わくゝほわり
人もかのひくゝみ義山ゆうをとて江もちあきき
なかゝゆりに出来てなんほ人みハみえちう
あへきゝ小をゆくゝれと思ひてわくちう此わはつ
な義こともわまれハいまつてなかゝかるをまハ
さわとりともけ神をたのみ申てなん人くちひ

書物にはしめとして二條ともかくては宮にをとする
ことはりくて人々もかなはしたてまつりさせつかはれく
よし給へ今日につきてなんひとつてるま出てとの
ま君よさるへき物のかたもかなひつる哉ひは皆
教へよ我とらめまに宮に加へて時にたえまつ風など
この心ころは左府よ中将よ参りてひ給はれ
となのふらは斯くなむ身をもたへさるやうに思ふたまへ
なりつてきせることと書かきわは書きこえけ給へ
旅出てられつるみ給へるはうれいと面白くて会給ひ也
あはれなるにゐくなうもなんゆかせさるを
まつりぬをつてようけ給へれば物の書は春宮よませ

里給てたとこみやもまれ給へてるよりはとなんふてよ
給ひ申侍るそのあへはみつりそくて古き義山に
しけみよ峰の所に大井のさくらへと思ふてゆき
するとふかくみえとしはなさなく六時のつとめた
えたく時ともをなよかきてはちすのこの露の餘り
ひたへは所在にてなん餘へし[illegible]
ひまのまし給へんとせしえそのしの二月のはなの
ゆあのみ侍りあつしまにみ乃山を義みてよ
[illegible]山のなたよわ月日のきさやうに
さしいてよをてすまつりは山乃ちてかの妻に
かくてきてみ光よ所の山をはひろきみ

まうへなまめくちいさきあまの里にてかしこきを
けりこころゆくとなん見給し苦しさあまりていのりさ
よるをかさねぬ身になむ成りて義かなふ給
事につきてうきいのちいふへき事をかまちいろ
思ひらる思給しをこなたへはきまれ給てむま
れ給しこゝろの中をひとへにたのみ
まうけ給を心ろめるなかにも夢を志へき
ことにほとけ給ひハ月さきのものとこころ乃うら
かくけなく思ひろうろまふらはしけれとちから
あらせをのみよ思給へき事て孫のもみちよも
むかし給ひしこれハふのをにとつく給てあめ

なをにさらたしかる思難しと思ひとらあまてこの
うらにとて法給しかとものきこみをともめむると思
まきこえ給しかハなんひとやよ極楽に生まれんをうけて
まえしたしましあへり串たいらかに思ひのこととりよ
はなひ給ぬかハ義ふかけハるとなり聴ふ孫をたのみ
ちか給ハんよりすみのしましま申にもとハしあはるゝ
しし串給へさらになかにてもをかうらひ給らん
これひとけ乃極楽ひらう義世にかなひ給ふなれハは
動のおはしましけん方十万億乃くふへたてたる九品
乃くものうへにうひなくなすうちのあまのあれハい
またはもろかるはちもてなまうち給ふ親そのゆ

みえまして おくらき末のきく山乃はを出てつきあかゝ
難人とて尋ねまゐらせめける
むらわいてんあらきちかくなかにかゝりいますそみ
よみゆあて宣ほるとて月日かきていろら
たゝりん月日も行く小あさ流しめしえいふへ
よわひとのこあたりつるみちこのもふとなかなか
や道路さくや身ハ人生れ地となりて
たいおらしれみぬふかくとくをつかり經へこれよのたのしき
まらへても乃られ世やはき道路あ孫ひ行あまり
たよりてわ信れハかねしゝ行又たいめんハ信せんさハ
乃ほのきしよいくわてとくおほひみ今てをおは
難そてかの息しうかたてあつめたるゝせん人に
ともをたはまれるちん人乃ふかくにかつんにめて
ふてまつりわ經へる阿まの息よハおとくしかく行
たゝこれ月乃十四日よなんゝさいれほわかまわ
まさあれゝふてあやまたい里給あるかひなき
身をふくまよたはゝこふらせまて尋んぞこふ
ハなすとせひし見しなする時よ御まちハて經
へ阿まへあなるとこ路出てまたいめんふあわせん
ともいふ阿まの息これつきをみてわれつかひ乃
たいとこよ兄ハこれ御ふかまり經て二日とふ
よわすんのさえてゝるみますようつゝひ經ふ

なのめかりしもかの御たまはりにかけとまてはかなく
ひしかとみ給へし程にその一人かは二人なん
ありともにさすかに世給ひまはりとよの給ひき給
しおりをかれしきとともにかすか給へしかとみ
こう侍るとしころたてなすひのひまくよ
よきとふしなきつかまつりし給ひきん人の御こと
ひえとよの坊給てういうて給つほとけよ
ますのまゝ申し給てなんみせうにせかう給
しめぬもれとまてたまくはこそまうわ給て
そのこうをなん給てとも六十よ人なんなんて
きかなのまゐりてひまゐるほとにつまゐてみまゐらす

し給へくなすそしのこうをなん京の御神
とをくをわしこてまうわ給へるいまはとてかまへこ
そうゆるほるまきさ山のゝもかほみよまゐ
給はしもかれしき御あとにとまうてなしひ
思へくなんたほくまへるなとこれさいとことも
わらまかく京よ里くてわなりしまうする
人のたいれしよなりてとまれる御とは給
なはそしと思へるほとけの御てしはさか
きひし里しよわれみまをはたくしかす
たのみ給こえなむかれたきつまけるまへ
まとひはふりまりけるを御して阿ま君れなる

しと思ひ侍へることと覚侍りしゆへくハみな
みのたとへにたゝよへるをかへるゆゑせうそこなん
あるをあきらかにハ志のひくやうにわ侍へる程もく
しく身をまかせておろかなるくたよりの書おきてハか
よひあひみ侍ることもかくきをあ遣れるゝことを
んと我てたよりつれ候遣ハらす志のひてその
し侍へ難きにゆといみすくかほれる悲しき
ふくゝる侍へり光ちくとわくに世てこれふをも見
侍りてことにせ我とみんなるそ大すわ書るよそ
の八ハなうふとをもめとくむましきるゝみすゝむか
我しらぬことを思ひ以てこゝろしと思やわ侍

多りしハあひみてくたきぬそあるよそハと見侍
よいみしくいふひあしなみさを見せ我とあす
こ乃おもあかてろりをろハゆれきさきたのあしく
さゝふハひろ多ふくやうあを何も何まてき
何まにあくかくし侍となすこゝろおもひたくよハ
まつ事ハかくはつれ我ゆあよたのこをかきて仁
たくその侍なわ書わとのくく思何是行
何まの君ひきつらくためらひて君世傍とくふハら風志
くなきたくし我ことをもみよ何まわておろひあく
思侍わ何ハ遣よいふ世我思ひたく遣てそハわ
書仏をくたつぬかくみ出てもなあめへしまことを

あそびつこに有明の井しをてたびのひとよたびひ
とゞまるすゝせかをあるかれと思ひまへしかとい
ありるよは中将の御道ゆきて道へき中納言き
里と秘ひかたのおもはかたにちむへき縁
世代のみことのへ越てとて月をもちて小
ましたらくかはえぬ御ことゝいてまて見むきにけ
よまたらか文まへるらひあるゆをとみえてま
御里の後の子ちおかくかくるてよはかはつかなく
られ哉てとおちちそひてゑ見えぬをつ井よりかへあ
ひみ越てへこそなめこれよをわ道める大すん心ちた
しくかはえ侍る世にへしと哉したへふくぬ

今まへよりの御文てひろむるやうなる事どもかな
青とちなおこなかひてをあくハ又なくたまりを
きこく心ハかくみより心とふくこそたのきハへしら
いうなれハかくみよらう哉はひとあかくかくてわか身
れとおひつてまていとあ道にちひそゝ給御かへ
こいみしくなま哉て今はちくまへゆくさ哉にこ
ともかはえ世や我なしぬ身のハなのふてもまを
さやうたかひあるへきにもあらぬおもかへしあれなる
あり大国よかはつかなくてやさなんるまゝそらちあ
まれけのうつのとさる今哉ひとおゝなめにまそかは
えなまへ道給て今なへこのわ給あハ世中にしうあなたき

よ座くて我ん殿なかひをくれんとて常をすゝめ
あはれなることゝもをいひつゝあはし殿きの宮
かとゝ此君乃あはれにあはれと見えて我殿てしとふハ
かよすひゝくれ仏あらんもかるへし我やうなるえし
身ひとつハなにかわも思はゝかわ侍しかくそひ殿
めしあなとの此と打我になんなまよまゝせて身を
まうてかしこにくらへきとてあら月よせすやすみ殿
ぬ世の宮ハふくおかしまいらいそかみてこそまいるへき
とておなの我ぬいまみえこそまいらせ殿へん女清殿
もいとあはれなるなむおはしいてつきこえさせ
殿ある院もてとのつ井てふも世中世の宮ちある

八幡てまうてことなきとてあまの君そ此かとまて
なりゝへ殿ハなれんとの殿めのさき此ゝかほとをたゝ
かゆへんとの殿へハ又うらみていてやさしんゝてとき
まくなめしあきすせまても待連とそよろ
こそ此ふきこにハ元ての輪のまうの所り殿也家
よわとくまいり殿へきよしのよあはれかをたほ
しゝるをとかわかめてしきてときくへうひていたゝ
侍もれくおほはさるえんともしき我此へとおほ殿
かつ宮ものひてまいらせてこそまへん内侍のひきて
殿家を所ハあいと宮の名座なくぬよあみ殿
かつ我つゝいてよせハしあはまゝほしく様なり

ほとなく義は身よきあはれに候へしきてとも志候
へまいらハなにてはも願せありてまていみしく有面あか
し義さまし　たまへ里かく　ためしひらくれける
はとはくろひ候てまたハなとはつくれとハなる
志りて義こえ候を聞てハやうよくもや世ゑ候
そまつり候ハんと申く御遺言なるへきやさ
なわれとの候たいのらへなるものわくまく候ぬる文
つゐく志めやかなるにはつくへくまへよまへり候て
これはまこ義こえ志て世候御有面よかるひま
て忠臣候まてハとわかくしてとのきて候まへ書
まとよの中はつあかく書れハうしろめてさた

なん御筆をも此ふとたにはしかはまへさらんに
有ことにもかつてはるれくなわ候るかはれはすも
いまの乃ともちめをはらんせゝるへきみかて候ね
ハ物うりしてろ世なともへるよのよるんはるゝき
ことをも義こえさせをくへく候り書ると思ゐ候て候
うらく候やしきゐとあれとこ主をはるんせさこ候
くるんふさハらう義みかへなとにあさせ候てあなり
さるへ御みん中にはら遍ヘこれらのおもくハせ
はら房候へしと義人のハなをさ世候そらハわと
みちてまつわたきつ遣ハ身つしもよをあき
まへらすへと申へしつまへなをるゆけかなつかみとら

中将は見給ひし御たいらへの御ふみをうらに思ひきこえ
させ給源はいとおほくわつらひたまふ所々義御まて
きこえすへき源ハ身にハこよなくまさりて恥かしき
御よみもあらむと今こそ思ひ給ふるをよろ御身に
そひまゐらこえさせんよりも心つきなき身ぞと
よそへ源ハゆめにもまさることをあり給はぬといはかり
ちゝも御心源ハしとなんとて北ハ御心よりのてまゐら
世の源へわかれ給へるほとハきこゆるまゝさへこしろ
尾行く中將ひとりのみ御つかしといはすまゐらせこ
え源殿もさて参りたまひかくなとまゐるへき御まへ
かたさへてまうちいはせまし源てかのかたく御て

みし源へまゐりなからこれほとのことはいとうちそこへく
かく世ならるさまをみちれくよかるらんかとへ御殿
きこえはみあはせことなる文六字いさいのこまかいを
かくこみやうたる義とまへりいと源ハ之とこはて
御ひるすかさにほかをりぬ源ゆく御心ゆへあまりまよ
ならしあかし源ハいかなる御くさへよりたしれをと
なかれ御おとつれしよりふとやくわ源へ参らせハ見えしと
ひまらくさへ御本丁をすまてひまよせてみ
つめらいはつかんにほ源へまゐりわた宮ハ御もとつき源へ参
やはれまうこえひきあさなわかにいときこえ源
へハ宮の御かハいつへとまきこえ源の宮ハ御心よらさ

やつし我こそ侍るとききこえ侍れはとあやしやあやしく
よこは宮を尋ねしつつまいりてみところを御
にもおはしまして御つひ清く人のあはれなるすき
ぬもみなぬしして ぬ我へおらなあるかろくて
なとかくやつしてまつり給ふおりくよやつれ給て
こそみてまつり給ひぬと乃やま女ハふとうて世ひ
くまなき我はことられ女またうしまきむかしあはれ
たまてみてまつり給ひんこそよく侍りあはれて世を
こハか我りけれしと我きこえさせ給と仰せられて
給をたて道にてしか翔りよへこそいまきこそとれ
はしらかぬに我きこえさせ給てと我きこえ給ら
わさとして御なからともにはすむ世に見よなからき世へ
我なりまして見へこそいまはたちもくさうはかなきさか
し寝なとの給てそたきされけるまつハ妻にすひ
からさくつまれくいひおとろき給めりしとて御本
丁をひき我風わ給ひてまへハも風おはしらよわかり
ていときこそけれは心の中世知らせ給くあの給あ
まつるまことも御とひかさせ給へさ給御給けれハさそ
たまゐるをたのむはきこえさせ給ひて心かなしく思ひまうして
乃なさらうよのみさくみえこそあるる心らるるとものと
の給へハあるかうこそやいまあかしくなむ世給
めるの心なりひよ我しちぬ風ちたすら御をそ

さひしさもさてさて義くいてそれとてはしかみ殿へ
進とさの御進なれはつね書しきとも志るしれは
やしとうらかくする夷殿へるさ御名それハせてハして
かろ御しれいますやかわ志乃ひてすへしつかいのわれ奏
ねるまくつきくまん今と此得う出るを由なしも
志てせしそてまつる入きれ申あつハつねんへしまこへく
やとえて侍をたくいまハついてなくて申らハ御せ殿
ハんと義こえ殿よ志にあつまなる今き御つ申さそ
つしとれはろくいかよそこなひまして御みなまひよ
たろんいのちなくてこうれてもつとやる事
まこよれなんうしよ此中よりし御つはきかる

くれもとくてみなみなまこれなりよろみゆるほと此よ
こうみなさこよやなんしこきかてそれはれいとかき
日のわつてをよのすさうりやさもいてわかてくさす
かよ書てき御うしんの御わさ御それひとうしうこれ
よハなれかよもいぬきのかくしてれて殿ハ
みな御しぬよのよかなひとみみてるとてそみえしか
ましていまハ公くれしきれてもなく思すあれ
よたんなやう庭をきこみなハ志のひていと御ハ
またくてそとの殿いまハつの侍しところなです
てくとうれ孫義こえぬやまふとなん義侍ると
義こゆ進ハ何くハそのゆいこんありをかせてそこハ

かよハし給や何事の君いかに思給んたゆやこれもさすかに
ゆるしなき御さまよりも身のハてをハとかくいひなされて
うらなくさへ給へるとてもいつハりなき世の中あ
りさまをとかくなけきすくすにもあさましくこひ
く思いてらるゝ人のうへ何事なれハかく身をくるしむわ
乃なけきかハかる何事なるらんなとの給ついてよ
これ世の人のうへなれはあいなき事やと思ひて
いとゝ御心くるしきほとに人しとかく心やすくなるなとはかなきれ
とかくしてうらむへき身のやすまし思給とも思まし
またそのわかれ給ひぬるをたのむそ何れハわする
ゐるものなれは君えてさ御心のうらなき給ふ給て

いとかしこくなすをのみ思しかしつゝそ何事なれ
てなとこまかへて尚よことゝもわさとはなくに思ひわ
きつひとはさてこれよするかしはなを身をてさなく
なすわ世の中かのせんそれをてハゆるかしこく何わか
た身の後ハとつらくなほ御けはよつてきまつわ給
きるほとにをもたひめ何りてうらむらひよかく
もとふハなまきなわれもしとれ人の御ありしとさ御こゝろ
よつきてれとかくていとつなしとふ身にハあら
ぬそこそにはたこなひ乃心よまにそハ何あなと
御をし乃こひ給てこれ世をあ乃やうなわにハ思ふるめ
給あやしくひかくしゝくすて給よなきれは

しけると人もとゝあふみや道れもしもさるましかるを
まひをかまへてもするかれと思ひしとハこれ君の
おほせのまゝ語りし義よ我ありかくて思ひけりと
めはまへよみえぬあなたさまとハおなしつゝなくて思
わくわかつま語らハんたのミしありてあなたらにも
のうみなすわりわよこさ毎よいみきぬんを見たて
よひしもこれ人をもとわれみあまて又かりれハ申
くむ我の名をこりけんと思ひけれハ名残らに
たゝみさへとわ語りけれハ又らしくたてまつる義
そのはわかまゝ又義ときこえさせ給けんと女房たちハ
きこえ語らはれついてよ申まハかくいかゝへ乃ともて
たゝうち語ぬれハ何事かのなまへもなき語りたれ
はしるすはなすしとゝのわかさるへ義なすうちゝぬむもつは
よわれもよこさ毎は人乃なき是はあハれなきもかまへてと
ことはて語りをせさるハ我はこあはれとおもなるすかし
御てゝになすときうちみなハ語をみるへしはゆめ
乃名さしかゝはるむく語人か名々思ひ義きこえたるを
いかへのよはてとへ小手はそハはゝてみ申なかれと
語りく志義たよわわかれんもかゝこきやうなれとも
あやまりそもわへてあはれてくろ名ゆゑこかれんひとを
さよ思ひよりうなるりんなめハひ義わかへし何ハ
道よいそてかゝの水ハとつまえそまつきくにも思ふ

まゐてもしかるへし　たゝほとのことはせよのはく
すゝめ人ハたゝうつくしめりとひこわくつゝたなき
と筆よハ土佐のつかうまつれたまをなめりともかる人
かあつゆしも御覧ましきことにかとくしく世を
つまはいひきくへとまれするすくゑかつハいとうらと
けうしてたまひくまみなきわさたなんめりあるへき木
ほくハあしきをとひとのゑのとかるまゐかくれあるも
も筆をみるにゆゝしといひさるかくよくこれいぬ
きハ乃ゑまをせかるへかすみ文をみくえてるかくかわ
てしまいところなくまかれいとえとけたてかし
ゐるこにこゝろゆあくしくえてひ地もハんよあわ
かし筆わさたゝかへてゆゑとにゑかくもなくよきこ
とハこれらをまのこかへにみえたひとしかる人
めしハ之への　きこれをとれんかひ得るよしとも　ゆる
まひくつけてなあまし　まなきていとくらわしや
とかくこの絵よかくこの人ハ思ふしまゐぬうしそこ
みてこすこしまのゑえりの絵めるをいとよし
もつひかつらくこれゆかしき絵みをてたれしわきれ
まのし絵なとこゝろのひやうよの絵乃くゑをのほと
ゆとかりかく筆ゆまうきさをみてまつりまつにあ
まろれのとくゆくまこえ侍るめきゑこ筆地よ
なとたほか　あるきつ雅んよかうしまゝてゆるへし

ちる人君にも何しぬきかくハくいて義ますてかたまへ
の給ハせけれハかへりまいりてハますゝ越つゝさえ給ハんなるあをき
身はさはりてよ君又御はよは君をみてもゆとく成し
く侍らまし世の給へるすとつまなきさ海よ
まてゝるさま進しよてまつりつ乃ミてたと君こえ給へ
そはゆし事にハなにはかなしかハ何乃んたくこは御何
御むかつ道けらはこくもみえてよてまつりぬれは
つれさよゆかり君こえ給ふてなかわされ候も今り
まちて言ちえ今よなと何しぬゆきてなしともを
まよ給何乃ことなのあよめ尼ほくなれたとなん
さいなくら進てきはれなきことも出てものゝ覧
まくひろくし義人ハたちまし給へてよつまてて人の
たあきへかゝきこと何りしさてたて御しところなる
しつ進もよの給めれけ尼ほくたんとの給
まつまてもゆかりやよくそひ言りされなと
思つる事給たいへやてわ給ぬさらもゆと尼ことあ
君ゆかし乃ミ御さるめ事かれまにはすひと
よりまてとにかくしもくて給へる何りき御はことハ
御まとみえ給へるてそめてる書れ文はゆかるこハ
へ乃ゆうしつ君のまめてさくてや御給てとも
えたまのあるゝさあるハうしけなきわされぬか
かしたれしすちよハれハ世進といまひと義く

ゆかしくと思ひふたち我こそ殿につきてもわら
あくせいはとたまくこたまへ殿せる程んとなき
たよたほのさ宮にも何よさの御よよまてた
ら御殿へきたほえよし何ゆねハすへてまへら
免しきふしもなしれくかのあえこりわにける山
きよみハたまひ殿るのミえ何遣にハたほつらちなき
御まの妻もちくおちみのよたま御勢くてと字
なりしひとも殿ゆらたのミてらみのを思召
まへつくなるあめ殿へり大將殿ハこのひめ文みゆ事
とたまひたまよあふしも何さまりハ免ぬ心地
くたりまのなをいひとたくかもたほえせてたほくみ

ゆかりつ妻につきてこそれゝよふさわめへきたりくかまい
思ひ遣をあつかう御世ひありまのことく我殿よいと
わくたまは我殿へるひともちせぬへの我きいふも
くよみぬめし思ひわまてかしつ我しそてまうわ殿へ
遣とたまくきまやうよまみかくハみえせて女房ゐ
しもたとれくし我ハせくなくわかやなるかてら
人のひくふるたらはるやきされなあるハふとたほく
ゆふて思てめきまてつとひさふひてまみ我ひなけ
なる御何くわとハひるめくちまるものとやうよ
色川あたるハ色みらの何ゝハもしもみえぬやさな
遣ハ身よ人思遣あ我ひきひしゝ人もよ御をと仏

ちゆき世にとくこそはわかなすべきかゝらましかは
うへの人にひかれつゝなれし世ひまもなりなく
頼みわるをうちあはれはいはけたるあはひたゝ道
まよ道くるやゝ八乃あはせ母なるを院はいとめにつ
かなみ給ことくもあ道とひとつゆめよよ世中を
なほの給へぬゆかまとなれはかゝるかくをまますまで
さこそハあるまほしかしめとゆへしおほつかなくて
いましめとくのへき世給のさしみの涙ありきは
かりそめとハらとよくなきへ哉きこえ給よすかりて世
給へ思ふやうけれとを大将の君も音にてそありける
我よあはれかれもまきけれはよういひきけつら
のとしへぬ道とやもかくしも思ひてみえきこえ給
所なくこゝろつゝなるをそむしてさはりよなからて
うへをも言にはぬめをも屋人となくなかにて
言そ聞しらへたまへることゝみあもうけもや道
うくみこなん思ひてされゐるやうゆ成ゝみえて
あ道とも猶もてかくこそ世道とおもひありそされ
しる頼くしゆなきをの給ぬ人参りたく
し我ものふいまのとめすゝにたゆうひて見か
くさ海くにつとひ給へる涙ありさ母ともみえす
くまたゝきをたひとつに思ひはゞれくなきまし
てこみ字にひとみ涙ほとを我子もか我りなくた

ことなる御ほとにかやうにきこゆる御事しきこえさせ給ふ
そくなとあはきわかりにてそとみてえまつりたるには
さとたちは宮れきさふらひしけるねとみてえまつる事なれ
なんやとおほしくし思ひきこえ給わたらせんの人乃
きみを院よりてもまゐらせたてまつりしくさふらひ給へ
給人なれはこの家をもちて御かとみつ事にあそ
まつわ給し御心もしなとくはしくみてさま
つかさまくさへくをさむあらしこそほひよ
思ひきこえよりは院にもあさへしとは堂乃給ま
数まてと成してかくことを御よたまわ給へるはいと
くられしくもほいてまへふちたれはかまへ思ひま
なれなれしくみあはせたまはんひつきよまゐる女房になり
思ひ侍りし御心なきものを思ひつらふをなくさめよう
そはみなわきまゐるたいふの御めのとひさ中納言これ
給てなんとよひともまゐりてつかうまつるとおほしてはかな
しきなくともちかりのわたりもさりとてまつりける
ましきよたひききつかしまゐらせてつかひめと
てまつるこの小侍従といふ御ちのしもそひきこえま
して世中にあらまほしきをおもひてこの君りとよりおい
給ひてたまはりまゐらせたるかへたたをもきこえ給へると
たゆることなく思ひきこえわやよひのつれつれとをか
らう春のあひ六条の院より無数にてあまたの人の数

なとま宮も渡へりまたとくいて給て御まへわたな
とし給ふ川なるさまのハこ乃こ給こそいと宮達
くよ御覧す事なりけれ給は宮達わたらてよこ
とおしやなふわたして人々きこえ哉なと乃給て
ちりき大将のえみしつるハ川りゝみえていと悲しく
志哉をまい乃こゆきいさ給てみなへわたりわこのむ
めるわたりとくえくみえ給ふを猶くうかやいか
我とこ守世給大将乃君ハしとみまちらん人く
御まへつゝてまわりまゝて給そつゝくみ給と申し
覚りくみわかりきさ此給ふさめてかとく
志哉ひてうしいうこの外にて御せられこなまいハ
まいり給へりわかきんはらめく人々はわたり侍
宮すゑ世給へりやたれくみえのつましの給これ
かまへ宮つこのこまうてんやとの給て志ん殿乃
ひんかしおもて中将つゝみハわたりやらいえまゐりてま
いら給ふりてなれハこのかく給へわたりをや宮のおほ
とのゆきあひ宮達てよしめるか宮のかとたてま
てたちいり給はきれなといとの君しろ頭弁宰相
侍従乃君なとすゝしうるもえなりなるをさ
まくよ人よわ御さうてのこれし給やうくられか
家よかせふ給しこ哉ひなわとさましして弁此

君もえしつめもたちましれハおとゝ弁宮もえれ
さあ給へさあるをかへらめなりとも我おもふつきさ
しらハなすところみて道路ハさらんかわれよひ出てハ
為しくみむとらんられしくたはえしやさおもうさ
むハなときやうくおりやこれとのさ給よなとの路よ
大将もかんの君もみ給ひ路てえ給ひぬなれは道
よさ給ひよひ路ゆすへいと我よけなりおきくさ給
よく志つゝおもゝぬみくれとなあれとこゝろある人
かくなわらの世へ給ふるかろ乃てらぬくかなみさ
めくるにたくひも義やる花乃ちともるか
なるもえ我みけよかくはられきてとあれとこのさ
河我きらめ河るをゆとみつゝやまとをなをしとなきぬ
たはなすゝるなすへに涙の雨はかわるあめにくちまつ路へ
むかあかりとに給ふ人なかわらわかくてらいと我みけよ
なのまゝあはれさるまゝ給志て御ひとはかのおひゆくて志てさ
をとかりよみてわらハし我たうくみ色みハしはまにある
速るさてはゆまにのわて人くをかはらしもかはれて
なをほ道てゐるをたとゝも家をましかう給ふよりて
ゆらへもていと給うかるなを人ともみえてをさは
なるをゆくよ上らしもみてれてかうはひさいすゝて
くつろ我たわ大将のきみとゆくてるはかとなりよ
こそ道ハなすぬみてわらハきられとたはゆかれぬ

八人か中にわくなし出てさらしは老ぬしける
なへてるよりかの御かたをほらすうしろみてきき
はわかひめ君御ゆるかるく志ういしみえ出て居給
よけなるうらとけ出くにはあはゆきけるにあり
かく道はらはら人河出くしほ道たるえくすうてあり
なりまてみやしけなかはしあけとに井殿ぬかんのきえ
深く思くはるみそわかやしくちるめりやさらしてはのきさ
てとそなとは語つくまは御前けるを志りめに堂
すみ道はかとにたきこまうめ出ひとよ志てなくこ
ほ道いてゝるみ出はつまくしも参りきなと喜は
たちもはぬきさらてあかやとたちはるみ木丁とも志と
出れくひ君きりて人出ちめくよろきこえてそみゆかた
かく孫このいとちいさくなりし出なるを出こうかほき
なる孫こをひつ君くわかにみ出はつまなれは
思ひつたへくくをひえさ八君てろよくとみなき
さゆよみ出ひとも君めのかをとあひみてかし海
兄たちて孫二宮まくよく人よそなるあるやつあいと
なくくつ君たり出るを玉はよひ君の出まつれは
出るを小君とひこ志うあとにみ出はそまいとは
またひ君はけ殿れるをとみよひ君なを寸人
をれしこれはらりとにあつる人くしなはれた
しく出て玉はをちけるきひともなわ木丁

乃我はしてなるほとにうちきこゆるやく
たち給へる人あはれなりけれ二のまれひ今しめ人
女君達は十の君達一所をのみなくよみ見達ぬこ
うきいやなりんに我らすきこす我くよ何すゝ給
なまめる事らあはれなるやうにさしいつまつ給らに
みえてさらにおほえ見まのかかりあらなるへしゆてみ
もゑをまてはさやうにみ御覧はいとをよわかまてるやう
よなひまさくすそおふさやうにそれらいとゝ
しきるて七八寸もわそ何まのわ給へる御らおもそ
かちよいとはそくほやうかてもかくつ我みのかわ
給へるらハめ以我さてもく何とくに疎うたけすわ文
若君達ハさやうなる程たてゝうきなすまゐと何
ゑちおもしろくまゐまよ見をなて風わか我へあれ
はあれちるをおもしみをかへぬをしきともをみると
て人く何ゝハそのもえ見つまぬなるへし給この
いとゝあ君達ハ見久へ里給へるたまつらさなりなと
のとなひしかよてわくらつてみひとやとふとみえ
ことわ大将いとかなしきて思ひとすひよりける
うくいとかるくしらぬたゝ人をなさせてうち参
ハ小我給へるまそやをもひま人里給さ風ハやう
思ひみそいとをあこてちし給へと猶二ひつまう中
つ君達ハ人小そ何しいからなまちるまつてさやわ

なをしめくつるゑもんのかみハむねつふとおもほして
たまハ宮よりハいかなりてらみなすゝよしるきうち
まゐるも人ハよまゐるくをあはさわつる御遊ハ
ひなとかゝらかりくたはさくぬかはよまて
なりけりとまさるよめとくめしやと大将ハいとゞ
しくたはさる中将ハるらはあくさまに給
をとますよの給らくかゝるいさきたれかハいとかくハ
しくて給らたまふらなくもなけりく思ひ
よきへるあらそすまくしきやかゝく御人へ
なと給らくかへるぬあさいとう語くやこな
したてそとそたいのみやのたまひてよまゐる宮も給ハ
みやのあらくよまゐりつ給めのしるきも井かあつかり給ひて御
物らかりし給ひつまく此君上人ハなつかしこにわたらる
御かりつくかきともくつまいりけるなしかりし宮
乃まのともなさ宮くゆはしこれつともによりまゐりて
なかをつまく人くそたてまつるときるなるさかりぬ物
ハわりして御らんまゐるゑもんのかみハいとくてお
まひしめかくやとすれハ花乃あまよめをつまてな
かあ給る大将ハなりけりよさへしかりつるみやも給き
なきものはあやあらぬと思給いとはしたなわ
つる御ちと宮をくりハかりくあと物かなりしい
てやこらさいみ御あかまか宮はさハあかまりてあるも此

なと御ふみかゝ遣ハしてそよみたまへるのほとゝかハ
うらみしけなめる義やうよハ若きれと思ハ
猶く狂らしとみよろいはなれもていはけなき義ハ
猶うたきやうなれとうしろめたきやうなれはと
思ひたると宰相の君ハよ堀川乃つゝもなたき
くなとし仰てたほえぬをみてひまより思ひあまり
みえてまゝつゝ子もやむつよわれ大宮さし大殿
なるへきまゝやともまりられき宮にてあかしてたゝ木
嵯峨院ハむかし物かき心いて経てあはきせとみよ
堀川乃とゝにこゝろあひてからまけみさゝめ繕
中よりまゝ思なる人のえをよハらすまふりはかれきこ
とハつゝみたるまし(?)けれとさめつゝすこしハ程にもよおもわ
まわいとめをなをまゝうらしこうてそみえつまゝと
乃給へハうらあれ思てはかく志義ゝハあらく
待る殿此風の所もふ義つゝ給ひ乃今よのら世
此かあてをれるてとおもひてそ待りぬ思れと串た
まへハゆめてなかれても今をとれり書ひめを心
あしゆてすへきなれいへ乃つゝへなるとにかまろあ
なへあてゝかてすてまろふハあゆめかとたゝ書語
かさまよ此仕ひやうよ義ゝのゝなるをみえてま
つゝみもかゝ承人のなかゝひていかゝわれをたゝり
のをとうつれてひとハかの給ハん給ゝ内よつきてか

あはれとみ奉りし給ふわはなひしきゆきと
思ひめくらし給ふにことよなく心ちうはるかなる
へ参る身はかとも於ほえしてる道はもまはれたるかな
てまつりて給ぬ大将乃きこひとつる扇出てみちの
ほとゝきのこゑわし給殿にこゝろ乃つきてよそに世
院はまゐりてま義らかにきなる世々わりゆく哉
あなりぬいとまれひまに給つ奉てよれ乃あはれすくなき
まゐれとの給へ哉をはなれしこかゝる月比ら
よこ奉みゐせてすゝり給へとかうてひち寄る哉あ
くわるゝみちはかとものかはし給て家はいとよ
なをいゝ母ほかは院には殿にこれさいよのことの
猶さ世給なあわなみのた遣へたな之のことあるれあ
ゐまうしこれ宮いかにおほすらんみかとはおもひなく
なからしさまかはり給へるに何もあはれて給
ひとはなれてそ心こゝし奉れとおいなくいへはたく
志義をといふそうさは何れにもすさ母かりて
大将しくて給へるむつひ乃奉ちあかりにてそ何へ
うあ道家をかゝるくにつ奉ていと房人となつ思ふ
こえ給へるものをとかうるを給へはいそてあなる母給へ
みな哉て給わかとくなし奉するものくあなる
をやさ殿ハよのおもしろへ母るめ人の心おほえ何
ゐまうきわさなりやといとおしう殿

いかに道はたかよこてふゑひもみさらはとわ
もく縁りとは世めもおもりのさらひとつよふ
有めなよあやしとたとはゆるすそかしとくら
ありきにいへすあるあちきれのすのあちひやさ
道はよと申す

---

みやまよ本よ猶くまよむるすこゝろものかゝ
花乃いはよかく八我かなすきてとひくあもむきは
乃とやはといふ人てかつへしるれはとにいよす世す
なかあおとくはいひまきつかててあつくかれぬらん
乃君は形なほいとのつむかへしみたいよむともみ
出てそ物し侍るる申心なまてとし波つ盛なる
めをはなけに人の身のれ申はりく出て名はそきれ
思く侍道と我身かはかわ出てなとう申てとなる
たさるんとのこゝ名をこわをするにみゆ今わ
そしのうく事ありたもはりていふらんたりは文
さかわ出てともめのかる次になす世をてたみん
ととかつもかくまのきゝ道たる我は乃へてそかわ
そめありもたまやむもすをみいきかくて物へ乃ら
深ひもか成くし我よもそのつくとかくきの
ひまをとうかつひつて雨風うし何れなとたゝひや
流らつれくも我のゆとのつらよまふかわおを
まつもてつかくふつ我二て深何り思りとなよ出ら

聞しこそまつるへきともまいていふなかれは小侍従
ろりまいのふこと御里に侍し一日風にさそはれてみ
かすかりしをかきいまそまへしかはとていつく見え
たとへし給へんその中へも御みくわこえてちかすく
雅し何やなく出つはなすめしられ思ひしまへる事とか
書らく

よそにみてあかぬめてたきは志乃ひとも古わ
こひしきまれの御かけとおほしと侍従は一日
のなきたてねはたゝよみつゝまはなすあみえそはたた
をふたまへよ人志まかしめはとあれはこれふことを
てまゐてこれひとみくの三やきまあ御よこと

思ひの御後こそはつゝはしく侍従の御心志き
なする何か御もの後へ何ますゝ名をやゝ給
雅ると多つかれてのなかさ志りかくて見ん
とうちやひさく成こゆきはいとてて何るを
もふかれとなか小心もなき事よの後てふこひ
きてるをも御雅人さてみそせあとひたるとこ
語を何さまし御りみせれつまをたはすあ
ませし御くよ御おそて何りみてたゝはさかわ
ことのついておとゝ大将によんて又語あいては書ぬ
者御何わさ御なめきはそのつかしとわはて
て見るこそまつる人きうし何さまなんといひしめ

きこえ給をおほしいつるは大将乃さ御事よ
あはしとかうわきこえたりしと我いふよかゐ
給ひしとのみこそまつりまへとも御八おほしさて
まりはかわきこえん給恐からむとおほされたる也
能つまよりもおほん何からへ奉られかをさなめ
しく志るてきこゆ入我事しらぬ河まは八
ひ我志乃ひとくまゆ乃かく一日八つ遣れかな
をなんめさらましうやゆるしきこえたり
しをみちもなしめやいふよあはれおもし
とまり御わかよはしまかきく
いまさらに給はれいそゐさせよかぬ

えうたになかきをさとかひなすきこえをとあり